

---

**東京藝術大学**

**音楽研究科**

**リサーチセンター**

**平成 20 年度**

**活動報告**

---

◆ リサーチ活動

◆ サポート活動

◆ 広報活動

---

平成 21 年 5 月

---



## 目次

はじめに～東京芸術大学大学院音楽研究科リサーチセンター事業について～	1
音楽研究科リサーチセンター構成員	2
平成20年度リサーチ活動	3
音楽研究科リサーチセンター他大学訪問調査（資料1）	4
「芸術系大学院博士課程における学位授与プロセスの研究」に係る 意見交換会議事録（資料2）	10
実技系博士課程に関わるアンケート用紙（資料3）	16
実技系博士課程に関わるアンケート結果（資料4）	20
平成20年度サポート活動	34
音楽研究科リサーチセンター第1回説明会（資料5）	35
音楽研究科リサーチセンター第2回説明会（資料6）	38
平成20年度個別サポート状況資料（資料7）	48
2008年度博士論文提出者サポート報告（資料8）	49
平成20年度学位申請論文提出者に向けてのアンケート（資料9）	60
平成20年度リサーチセンターサポートに関するアンケート（資料10）	63
平成20年度広報活動	66
音楽研究科リサーチセンターパンフレット（資料11）	67
平成20年度会合記録	68
音楽研究科リサーチセンター準備委員会・運営委員会	69
音楽研究科リサーチセンタースタッフ準備会合	71
大学院音楽研究科リサーチセンタースタッフミーティング	72



## はじめに　～東京芸術大学大学院音楽研究科リサーチセンター事業に関して～

### 音楽研究科リサーチセンター設置の経緯

東京芸術大学では、平成20年度より文部科学省特別教育研究経費を得て、芸術分野における博士学位のあり方に関する研究を目的としたリサーチセンターを開設しました。このセンターにおいては、作品制作・演奏といった実技と研究論文との関わりや位置づけを調査・考察の対象とし、調査研究の一環として実技系博士課程学生に対する論文執筆の技術的支援も試行しています。

大学院美術研究科と音楽研究科それぞれにおいて、各分野に沿ったリサーチ活動を進めており、芸術実践と理論的研究をより有意に結びつけ、さまざまな形で社会に発信できる優れた人材を供するため、多角的なアプローチを行っています。このうち大学院音楽研究科を担当する組織が「音楽研究科リサーチセンター」です。

### 活動目的

音楽研究科リサーチセンターは、下記のような活動を通じて、今後の芸術分野における博士学位のあり方についての提言をおこなうことを目的にしています。

- ① 音楽実践と理論を結ぶ新しい学術研究の可能性を模索し、その成果を社会発信すること。
- ② これらの成果を集積し理論化すること。

### 活動内容

上記の目的を達成するために、音楽研究科リサーチセンターでは、次のような活動をおこなっています。

- ① 国内外の他大学芸術分野との相互交流を深め、意見交換をおこなうこと。
- ② 国内外で過去に提出された音楽分野（実技系）における博士論文の調査。当大学を中心としたながらも、国内外の他大学についても調査をおこなっている。特にアメリカ合衆国における、Ph.D. (Doctor of Philosophy) とは別の学位である DMA (Doctor of Musical Arts) の実態調査など。
- ③ 博士論文執筆学生のサポート活動を通じて、実践と理論を結ぶ新しい博士論文のあり方を探ること。
- ④ 博士学位取得学生の成果発表（音楽作品・演奏および論文）のサポート、記録作成を通じての社会発信。

### 本報告書の概要、構成

上記活動内容に関し、平成20年度の事業について本報告書にまとめました。大きくなりサーチ活動、サポート活動、広報活動に分け、それぞれの概要に資料を添えました。今後の活動に向けての一里塚として、1年間の活動を振り返っておきたいと思います。

(平成20年度作成のリサーチセンター紹介パンフレット文章に基づく)

## 音楽研究科リサーチセンター構成員

### ◎運営委員

主任 檜山哲彦（教授・音楽文芸）  
大角欣矢（准教授・楽理科）  
河野文昭（教授・器楽科弦楽講座）  
迫 昭嘉（教授・器楽科ピアノ講座）  
杉本和寛（准教授・音楽文芸）  
永井和子（教授・声楽科）  
三浦正義（教授・邦楽科）  
吉川 文（助教・音楽研究科リサーチセンター）

### ◎スタッフ（[] 内は専門分野）

専任 吉川 文〔中世・ルネサンス音楽、音楽理論〕  
特別研究員 遠藤衣穂〔西洋音楽史学、宗教音楽〕  
土田牧子〔日本音楽史、歌舞伎音楽〕  
中田朱美〔ロシア・ソヴィエト音楽、20世紀音楽〕  
中村美亜〔表象文化論、人類学・当事者研究、身体論〕  
平井真希子〔中世音楽、西洋音楽史、音楽理論〕

## **音楽研究科リサーチセンター／＼＼＼＼＼ 平成 20 年度リサーチ活動**

今年度、音楽研究科リサーチセンターで行ったリサーチ活動は、主に以下のとおりである。

### I. 他大学訪問調査

演奏、作曲など実技専攻の後期博士課程を設置する（設置予定の）7 大学を訪問調査。

→資料 1. 音楽研究科リサーチセンター他大学訪問調査

### II. 意見交換会

他大学訪問調査の結果を踏まえ、各大学からの担当者参加を得て意見交換会を開催。

→資料 2. 「芸術系大学院博士課程における学位授与プロセスの研究」に  
係る意見交換会議事録

### III. 学内教員アンケート

学内の常勤教員を対象に、実技系博士課程に関わるアンケート調査を行う。

→資料 3. 実技系博士課程に関わるアンケート

### IV. 博士論文調査

今までに受理された実技専攻者の後期博士課程学位申請論文の内容の調査に着手。

### V. アメリカにおける音楽実技系博士論文調査

海外における実技系博士課程調査の一環として、アメリカの音楽実技系の博士論文、  
特に Doctor of Musical Arts の学位と結びついた論文調査に着手。

## 資料1. 音楽研究科リサーチセンター他大学訪問調査

調査校：エリザベト音楽大学

日 時：2008年11月17日（月） 15:30～17:30

対応者：片桐 功（研究科長）

中村英昭（学長）

川野祐二（学長補佐）〔冒頭のみ〕

調査者：檜山哲彦（音楽研究科リサーチセンター主任）

吉川 文（音楽研究科リサーチセンター助教）

中田朱美（音楽研究科リサーチセンター特別研究員）

神永 彰（音楽学部教務係長）

### 主な調査内容

エリザベト音大での博士課程のあり方について

　　今年度より新制度に移行 変更点

論文の指導体制・論文提出までの過程

　　各年次での課題など

論文評価の在り方・基準について

### 受領した資料

1. 博士履修内容についてのプリント（新制度）
2. 博士学位授与の要件に関する内規（旧制度）
3. 博士学位授与の要件に関する内規（新制度）
4. 博士学位論文の内容要旨と審査結果の要旨第1号～第7号

調査校：愛知県立芸術大学

日 時：2008年11月20日（木） 16:00～18:15

対応者：井上さつき（音楽学）

増山賢治（音楽学）

大下久美子（声楽）

久留智之（作曲）

松本総一郎（鍵盤楽器：ピアノ）

大野智靖（主任主査）

訪問者：大角欣矢（音楽研究科リサーチセンター運営委員）

遠藤衣穂（音楽研究科リサーチセンター特別研究員）

土田牧子（音楽研究科リサーチセンター特別研究員）  
神永 彰（音楽学部教務係長）

#### 主な調査内容

- 博士課程のカリキュラムについて
- 博士課程の院生の指導体制
- 博士学位授与プロセスについて
- 審査基準などについて

#### 受領した資料

1. 平成21年度博士後期課程募集要項
2. 設立の趣旨等を記載した書類（音楽研究科博士後期課程）〔抜粋〕
3. 学位取得までのフロー図
4. 教育研究の概念図

#### 調査校：京都市立芸術大学

日 時：2008年12月5日（金） 14:40～16:40

対応者：龍村あや子（音楽研究科教授）

柿沼敏江（博士課程委員会委員長）

津田 隆（音楽教務係長）

調査者：檜山哲彦（音楽研究科リサーチセンター主任）

杉本和寛（音楽研究科リサーチセンター運営委員）

吉川 文（音楽研究科リサーチセンター助教）

平井真希子（音楽研究科リサーチセンター特別研究員）

神永 彰（音楽学部教務係長）

#### 主な調査内容

- 博士課程のカリキュラムについて
- 博士課程の院生の指導体制
- 学位の種類・名称
- 学位審査のプロセス
- 演奏（作品）と論文の審査のバランス
- 論文の執筆指導について
- 博士（後期）リサイタルについて
- リサーチセンターのD.M.A.調査との関連事項

### 受領した資料

1. 平成 20 年度（2008 年度）大学院履修要項 修士・博士（後期）課程
2. 平成 20 年度（2008 年度）授業概要（シラバス） 修士・博士（後期）課程
3. 平成 21 年度（2009 年度）大学院音楽研究科博士（後期）課程学生募集要項
4. 京都市立芸術大学概要 2008
5. ハルモニア 京都市立芸術大学音楽学部研究紀要 38 号
6. 芸大通信 京都市立芸術大学広報誌 2008 年度 8 月 Vol. 10
7. 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター
8. 2008 京都市立芸術大学音楽学部コンサートスケジュール
9. 京都市立芸術大学音楽学部第 130 回定期演奏会（チラシ）

### 調査校：聖徳大学

日 時：2008 年 12 月 8 日（月） 13:00～14:30

対応者：高松晃子（音楽学部音楽総合学科教授）

坂崎 紀（音楽学部音楽総合学科教授）

栗原利夫（教務課第 5 音楽グループリーダー）

調査者：檜山哲彦（音楽研究科リサーチセンター主任）

吉川 文（音楽研究科リサーチセンター助教）

土田牧子（音楽研究科リサーチセンター特別研究員）

神永 彰（音楽学部教務係長）

### 主な調査項目

博士課程の設置状況

博士課程院生の指導体制

学位の種類・名称

学位論文審査のプロセス

博士認定のための条件

演奏（作品）と論文の審査の関係

### 受領した資料

1. 大学院学生便覧 平成 20 年度（2008）
2. 聖徳大学音楽学部 聖徳大学大学院音楽文化研究科 ガイドブック 2009
3. 聖徳学園 創立 75 周年 沿革

**調査校：武蔵野音楽大学**

日 時：2008年12月15日（月） 10:00～11:20

対応者：池田 温（学務部長）

寺本まり子（音楽学学科長）

村上 諭（学務第一課課長）

調査者：檜山哲彦（音楽研究科リサーチセンター主任）

吉川 文（音楽研究科リサーチセンター助教）

中村美亜（音楽研究科リサーチセンター特別研究員）

神永 彰（音楽学部教務係長）

**主な調査項目**

博士課程の設置状況

博士課程院生の指導体制

学位の種類・名称

学位論文審査までの過程

演奏、作品審査について

演奏（作品）と論文との関係・博士論文のあり方

**受領した資料**

1. 武蔵野音楽大学大学院学則 平成20年度
2. 武蔵野音楽大学大学院音楽研究科規則
3. 武蔵野音楽大学学位規程
4. 博士学位論文 論文要旨および審査結果の要旨 第1号
5. 博士学位論文 論文要旨および審査結果の要旨 第2号
6. 大学院音楽研究科修士課程博士後期課程シラバス 平成20年度
7. 武蔵野音楽大学 2008-2009 要覧
8. 武蔵野音楽大学楽器博物館
9. MUSASHINO for TOMORROW vol. 87

**調査校：大阪芸術大学**

日時：2008年12月17日（水） 14:30～16:20

対応者：山縣 熙（研究科長）

新原祐二（教務部事務部長）

大原智子（大学院事務室課長）

西谷 健（大学院事務室課長）

調査者：杉本 和寛（音楽研究科リサーチセンター運営委員）

吉川 文（音楽研究科リサーチセンター助教）

平井真希子（音楽研究科リサーチセンター特別研究員）

神永 彰（音楽学部教務係長）

#### 主な調査項目

博士課程の設置状況

学位の種類・名称

学位論文審査までの過程

作品（演奏）と論文の審査に関して

博士課程院生の論文指導・博士論文のあり方

#### 受領した資料

1. 大阪芸術大学学生便覧 2008

2. 大阪芸術大学大学院芸術研究科博士課程〔前期・後期〕平成21年度

3. 大阪芸術大学大学院平成21年度学生募集要項 博士課程〔前期〕

4. 大阪芸術大学大学院平成21年度学生募集要項 博士課程〔後期〕

5. 博士学位論文 内容の要旨および審査結果の要旨 第11号 平成19年度

6. 大阪芸術大学大学案内 2009

7. 大阪芸術大学大学院芸術研究科博士後期課程在学者数

（平成20年12月17日）

8. 大阪芸術大学大学院邦文・英文名称表

#### 調査校：国立音楽大学

日 時：2008年12月19日（金） 14:00～15:30

対応者：庄野 進（学長、大学院委員長兼務）

神原雅之（副学長、大学院担当）

小林一男（教授、大学院副委員長）

藤本一子（教授、大学院運営委員）

杉江知都子（学長事務室室長）

調査者：檜山哲彦（音楽研究科リサーチセンター主任）

杉本和寛（音楽研究科リサーチセンター運営委員）

中田朱美（音楽研究科リサーチセンター特別研究員）

神永 彰（音楽学部教務係長）

## 主な調査項目

- 博士課程の設置状況
- 博士課程院生の指導体制
- 学位の種類・名称
- 学位論文審査のプロセス
- 実技系博士論文のあり方
- 博士認定のための条件
- 演奏（作品）と論文の審査の関係
- 課程博士の年限

## 受領した資料

1. 国立音楽大学大学院博士後期課程 学位申請要項
2. 大学院学生便覧（平成 20 年度）
3. 国立音楽大学『音樂研究 大学院研究年報』（第 20 集）平成 20 年 3 月発行

## 資料2. 「芸術系大学院博士課程における学位授与プロセスの研究」に係る意見交換会議事録

2009年2月20日（金）14:00～17:00  
於：東京芸術大学音楽学部大会議室  
(敬称略)

**出席者：**【愛知県立芸術大学】井上さつき（音楽学部教授）、松本総一郎（音楽学部教授）、大野智靖（学務課主任主査）  
【エリザベト音楽大学】中村英昭（学長）、片桐功（大学院音楽研究科長）、川野祐二（学長補佐、学事部長）  
【大阪芸術大学】山縣熙（大学院芸術研究科長、文芸学科長）、新原祐二（教務部長、大学院事務室事務長）、大橋智子（大学院事務室課長）  
【京都市立芸術大学】柿沼敏江（大学院音楽研究科教授）、龍村あや子（大学院音楽研究科教授）、津田隆（教務学生課、音楽教務係長）  
【国立音楽大学】藤本一子（音楽学部教授）、  
【聖徳大学】高橋大海（音楽学部長、大学院音楽文化研究科長）、坂崎紀（音楽学部教授）、高松晃子（音楽学部教授）、栗原利夫（教務課第5音楽グループ・グループリーダー）  
【武蔵野音楽大学】池田温（学務部長）、寺本まり子（音楽学学科長）、一杉久雄（学務第二課主任）、  
【東京芸術大学】植田克己（音楽学部長、大学院音楽研究科長）、檜山哲彦（音楽研究科リサーチセンター主任）、永井和子（声楽科主任）、大角欣也（学生生活委員長）、杉本和寛（教務・学位委員会委員長）、塚原康子（楽理科主任）、吉川文（大学院音楽研究科リサーチセンター助教）、遠藤衣穂（同特別研究員）、土田牧子（同）、中田朱美（同）、中村美亜（同）、平井真希子（同）、森田都紀（同）、長岡信幸（音楽学部事務長）、神永彰（音楽学部教務係長）

- 配布資料：**1. 「芸術系大学院博士課程における学位授与プロセスの研究」に係る意見交換会議事次第  
2. 「芸術系大学院博士課程における学位授与プロセスの研究」に係る意見交換会参加者名簿  
3. 資料1 芸術系大学訪問調査報告書  
4. 資料2 実技系博士課程に関わるアンケート  
5. 大阪芸術大学 2009 大学案内  
6. 大阪芸術大学大学院芸術研究科博士課程〔前期・後期〕 平成21年度  
7. 京都市立芸術大学大学院音楽研究科規程（博士（後期）課程）、科目履修、スケジュール  
8. 京都市立芸術大学概要（2008）  
9. 京都市立芸術大学大学院音楽研究科博士（後期）課程 平成21年度（2009年度）学生募集要項  
10. 芸大通信（京都市立芸術大学広報誌 2008年度1月 vol. 11）  
11. 国立音楽大学大学院音楽研究科博士後期課程各領域の教育課程  
12. 国立音楽大学大学院音楽研究科博士後期課程 2009年度学生募集要項  
13. 国立音楽大学平成20年度大学院博士後期課程（1年次・2年次）研究コンサート  
14. 東京芸術大学大学院音楽研究科リサーチセンターパンフレット  
15. 東京芸術大学大学院音楽研究科博士後期課程研究進捗状況報告書用紙  
16. 東京芸術大学学報号外 26  
17. 創立120周年を記念して 記念事業の記録と報告

11～15頁は非公開

## 資料3. 実技系博士課程に関するアンケート用紙

2009年1月8日（木）実施

### A ご自身について

1 ご所属 （該当するものひとつに○をつけてください。以下、同。）

- a 作曲・指揮 b 声楽・オペラ c ピアノ・オルガン・古楽 d 弦楽・室内楽 f 管・打楽器 g 邦楽 h 音楽文化学

2 実技系博士課程学生を指導した経験はありますか

- a 主任教員として受け持った経験がある  
b 副指導教員として受け持った経験がある  
c 受け持った経験はない

### B 博士課程制度について

1 芸大の実技系専攻に博士課程が必要とお考えですか

- a ぜひ必要である  
b あつたほうがよい  
c あまり必要ではない  
d 廃止したほうがよい

その理由をお書き下さい

( )

2 どのような学生を博士課程に入学させたいですか

- a 演奏面で優れた学生  
b 研究能力が高いと思われる学生  
c 演奏・研究の両面で優れている学生  
d 大学教員を目指している学生  
e 本人の意思があれば入学させたい  
f その他 ( )

3 どのような修了生を送り出したいとお考えですか

- a 演奏家として優れた人材  
b 大学教員として優れた人材  
c 文筆家として優れた人材  
d その他 ( )

4 指導教員会議についてどのようにお考えですか

- a 非常に有益である
- b ある程度役に立っている
- c 必要性が感じられない

5 指導教員会議に学外の教員または専門家を呼ぶことについてどのようにお考えですか

- a 可能であれば積極的に推進したい
- b 学生が希望すれば呼んでもよい
- c 指導できる教員が芸大にいない場合はやむを得ない
- d できる限り避けたい

6 指導教員会議において論文執筆許可を与える際に最も重視している判断基準は何ですか

- a 演奏が修了にふさわしいレヴェルに達している
- b 研究が進展し、論文が執筆できる見通しである
- c 学生が希望している
- d その他 ( )

7 進捗状況報告書についてどのようにお考えですか

- a 役に立っている
- b 必要性が感じられない
- c 改善したほうがよいと思われる点があればお書き下さい ( )

8 博士の指導体制で改善すべき点はありますか

- a 指導教員会議の回数を増やすなど会議を充実させるべき
- b 実技系教員と学科系教員の連携を深めるべき
- c 指導教員会議や進捗状況報告書などの簡素化、負担軽減をはかるべき
- d その他 ( )

**C 博士号の審査について**

1 現行制度における実技と論文の総合評価についてどうお考えですか

- a 実技に密着した論文が執筆できるので、良いと思う
- b 論文に若干の難点があっても実技が優れていれば博士号が認定できるので、良いと思う
- c 実技・論文ともに高い水準が必須であるので、別々に評価すべきだと思う
- d その他 ( )

2 評価の際、演奏と論文の比重はどのくらいが適當とお考えですか

- a 演奏重視
- b 論文重視
- c 同程度

数比で表すと（　　:　　）程度

3 演奏を評価する際に最も重視する基準は何ですか。

- a プロの演奏家としてすぐに活躍し得るレベルに達している
- b 演奏表現や技法の面で独創性が見られる
- c 新たなレパートリー（研究対象）を開拓した
- d 博士課程で大きな進歩が見られ、将来性が見込まれる
- e その他（　　）

4 審査会の構成員に学科系の教員を入れるべきだと思いますか

- a 必ず入れるべき
- b 論文内容から必要な場合は入れるべき
- c 必ずしも必要でない

5 審査会の構成員に学外の教員または専門家を入れるべきだと思いますか

- a 審査の透明性を増すために積極的に導入すべき
- b 芸大で非常勤講師を勤めている教員を中心に導入すべき
- c 研究内容からやむを得ない場合に限り導入すべき
- d 芸大内部の教員のみで審査すべき

#### D 博士論文について

1 論文指導は主に誰が担当するのが望ましいと思いますか

- a 主任教員
- b 学科系教員
- c 論文指導専任教員（新設）

2 論文指導の頻度はどの程度が望ましいと思いますか

- a 一年次から定期的に週一回
- b 一年次から定期的に月一回
- c 一年次は年に数回で、次第に増やしていく
- d 論文執筆の年度になってからでよい

3 学外での演奏活動と博士の研究（論文）とはどのようなバランスが望ましいでしょうか

- a 演奏活動を優先させ、積極的に行うべき
- b 論文がおろそかにならない程度に行うべき
- c 論文執筆を優先させるべき

4 論文を評価する際に最も重視する基準は何ですか

- a 研究に独自性があるかどうか
- b 演奏に役立つ研究であるかどうか
- c 論理的に一貫性があるかどうか
- d 博士論文にふさわしい規模（分量）であるかどうか
- e その他（ ）

5 論文の枚数としてどの程度のものが必要と考えていますか

- a 内容が優れていれば分量は少なくともよい
- b 400字×100枚（40,000字）程度は必要である
- c 400字×250枚（100,000字）程度は必要である
- d なるべく多いほうがよい

E 実技系の博士課程の在り方について、具体的なご意見をお聞かせ下さい。

（博士課程学生を受け持つことがどのような負担になっているか、

実技系博士課程に相応しい論文とはどのようなものか、

理想的な実技系博士課程とはどのようなものか等）

御回答いただき、まことにありがとうございました。

20～33頁は非公開

## **音楽研究科リサーチセンター／＼＼＼＼＼ 平成 20 年度サポート活動**

今年度、音楽研究科リサーチセンターで行ったサポート活動は、主に以下のとおりである。

### I. 音楽研究科リサーチセンター説明会

センター周知のため、及び論文執筆支援のために実技系博士課程在籍者対象に説明会を 2 回開催。

→資料 5. 音楽研究科リサーチセンター第 1 回説明会

資料 6. 音楽研究科リサーチセンター第 2 回説明会

### II. 実技系博士課程院生論文執筆個別サポート

センタースタッフにより各院生の論文執筆作業を個別にサポートする。

→資料 7. 平成 20 年度サポート状況資料

資料 8. 2008 年度博士論文提出者サポート報告

資料 9. 平成 20 年度学位申請論文提出者に向けてのアンケート

資料 10. 平成 20 年度リサーチセンターサポートに関するアンケート

## 資料5. 音楽研究科リサーチセンター第1回説明会

日 時：2008年5月16日 17:30～19:00

場 所：音楽学部5号館401室

出席者：檜山哲彦（音楽研究科リサーチセンター主任）

　　杉本和寛（音楽研究科リサーチセンター運営委員）

　　吉川 文（音楽研究科リサーチセンター助教）

　　土田牧子（音楽研究科リサーチセンター特別研究員）

　　中田朱美（音楽研究科リサーチセンター特別研究員）

　　中村美亜（音楽研究科リサーチセンター特別研究員）

　　平井真希子（音楽研究科リサーチセンター特別研究員）

　　神永 彰（音楽学部教務係長）

院生出席数：実技系博士課程在籍者40名中23名出席

### 当日配布資料等

1. 大学院音楽研究科リサーチセンター案内
2. 博士論文提出までの流れ
3. 大学院後期博士課程教育課程表（履修要項より抜粋）
4. 論文執筆に関するアンケート用紙

### 説明会の内容

リサーチセンター設立主旨について

リサーチセンター組織について

実際の業務に携わるスタッフの紹介

博士課程における研究の進め方

論文提出までのタイムテーブルに沿って

論文執筆に対するリサーチセンターのサポート体制

　　基本的に担当者1名を各院生に対して配する形

　　全体説明後、個々のスタッフと院生との簡単な面談

　　アンケート用紙を適宜回収

### アンケート調査項目

- ・学年
- ・主任指導教員
- ・副指導教員

- ・博士論文提出予定年度
- ・博士課程での研究テーマ  
(演奏予定曲目・論文で取り上げたい課題)
- ・修士課程での研究テーマ  
(演奏曲目・論文の題目)
- ・これまでの主な研究・演奏活動
- ・博士課程志望の動機 博士課程に期待すること
- ・論文執筆上の疑問 悩み
- ・リサーチセンターへの質問 要望など

## 第1回説明会配布資料

### 博士論文提出までの流れ

	院 生	指導教員
1年次		
4月	指導教員会議開催要請 研究計画書提出(3年間の研究計画と1年次の研究計画)	指導教員会議の開催
5月	↑	
6月	博士特別研究(博士リサイタル、作品発表)	指導教員会議の開催
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月	↓	↓
1月	研究進捗状況報告書提出	研究進捗状況報告書に指導内容記入
2月		
3月		
2年次		
4月	指導教員会議開催要請 研究計画書提出(2年次の研究計画)	指導教員会議の開催
5月	↑	
6月	博士特別研究(博士リサイタル、作品発表)	指導教員会議の開催
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月	↓	↓
1月	研究進捗状況報告書提出	研究進捗状況報告書に指導内容記入 次年度の学位申請提出の可否の判断
2月		
3月		
3年次		
4月	指導教員会議開催要請 研究計画書提出(3年次の研究計画) 学位予備申請提出	指導教員会議の開催
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月	学位本申請論文等提出	
11月	↑	
12月	学位審査会(リサイタルと口頭試問)	学位論文等審査委員会
1月		
2月	↓	
3月	学位授与	

## 資料6. 音楽研究科リサーチセンター第2回説明会

日 時：2008年12月8日 17:30～19:00

場 所：音楽学部ホール棟H-413室

出席者：檜山哲彦（音楽研究科リサーチセンター主任）

　　杉本和寛（音楽研究科リサーチセンター運営委員）

　　吉川 文（音楽研究科リサーチセンター助教）

　　遠藤衣穂（音楽研究科リサーチセンター特別研究員）

　　土田牧子（音楽研究科リサーチセンター特別研究員）

　　中田朱美（音楽研究科リサーチセンター特別研究員）

　　中村美亜（音楽研究科リサーチセンター特別研究員）

　　平井真希子（音楽研究科リサーチセンター特別研究員）

　　神永 彰（音楽学部教務係長）

院生出席数：実技系博士課程在籍者のうち論文提出予定者31名中21名出席

### 当日配布資料等

1. 本年度学位申請論文提出者への論文執筆に関するアンケート調査結果
2. 論文とレポートの違いは何か？
3. 資料の検索・整理・入手の方法について
4. 論文執筆のプロセス
5. 章立て・論理的な文章・書式・引用
6. 博論執筆のスケジュール

### 説明会の内容

今回の説明会では論文執筆に関して有意義な情報をいくつかまとめて提示

10月の学位申請論文提出者へのアンケートを簡単に紹介した後、リサーチセンターのスタッフひとりひとりがそれぞれ問題を決めて説明する

博士論文が授業で課されるレポートとは異なるものであること

院生同士の間でグループで話し合いの時間を持つ [担当：中村]

論文執筆に必要な資料の検索・整理・入手方法について

芸大図書館のサイトの利用法などの紹介 [担当：遠藤]

論文執筆の具体的なプロセスについて

題目設定に始まる執筆作業の流れを具体化 [担当：中田]

論文構成のための章立て、わかりやすい文章の書き方など

書式の統一や文章の引用方法など説明 [担当：土田]

芸大での学位申請論文提出までのスケジュールを具体的にイメージする

いつまでに、どの段階までの作業が必須であるか [担当：平井]

以上のような全体への説明会後、各担当と院生との簡単な面談の時間も設ける

## 第2回説明会配布資料

### 本年度学位申請論文を提出された方々への論文執筆に関するアンケート調査結果

#### ◆主題・論文題目を決めた時期など

- \* 主題は博士課程入学時すでに決定 修士課程で興味を持った内容、修論内容の掘り下げなど
- \* 論文題目の決定は博士課程1年次、論文の構成が定まってから、論文執筆の最終段階など様々

#### ◆資料の収集方法

- \* 芸大図書館の資料、国内外の図書館・研究所などの資料（桐朋学園大学図書館・フランス国立図書館・フランクフルトのヒンデミット研究所など）
- \* ネット検索（NACSIS、大英図書館検索システム、Amazon）
- \* ワークショップへの参加、レッスン実践、演奏活動など実地調査からの収集

#### ◆論文執筆にあたって苦労した点

- \* 論じたい、論じるべき内容を文章化すること
- \* 論文全体の構成を組むこと
- \* 実践的なデータの記述法 多義的な用語・概念をどう定義づけるか
- \* 専攻研究が少なく資料収集に時間がかかった 留学のため執筆に時間がかけられなかつた
- \* 演奏との両立

#### ◆リサーチセンターのサポートの利用のあり方

- \* 対話の中で論文内容を客観視し、整理できた
- \* 全体の構成、問題提起のあり方、論の進め方、文章表現などへのアドバイス
- \* 実践データの記述法 書式のこと

#### ◆今後論文を書く後輩に伝えたいこと、アドバイスなど

- \* 早め早めに取り組むことをおすすめ致します。
- \* 推敲の時間を少なくとも2週間以上とておいたほうがいいと思います。
- \* できるだけ論点を絞って論じていくことが大切だと思います。論文提出までの1ヶ月は本番の予定を入れないほうが安全です。
- \* 論文執筆は慣れない作業なので、自分にとってどのようなサポートが必要なのか、どこで必要なサポートが得られるのか見つけることは、とても大事だと思います。
- \* 何故この道（私の場合、ピアノと声楽）に進んだのか、習い始めてから今現在までの自分史や、この曲のどういうところが好きか等、とにかく沢山沢山書かされたことが物凄く役に立ち、結果段々形になっていったので、考えるよりもまずはどんどん書いてみるといいと思います。一見、論文と関係なさそうなことでも、最終的にはつながったりするので。

## 論文とレポートの違いは何か？

[担当：中村美亜]

Q. 論文とレポートは、どういうところが同じで、どういうところが違うのでしょうか？ キーワードを参考にしながら、下の表にあなたの考えを書き込んでみてください。

### 【参考】キーワード

目的、必須条件、内容、方法、先行研究、成果、形式、分量、読者対象、  
独創性、実技（作曲、演奏）、分析、解釈、体験、知識、感覚、論理

	レポート	論文
あなたの 考え		
ディスカッ ション後		

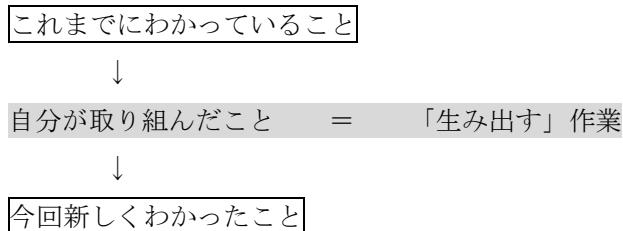
● 説明内容 [本頁は当日配布していないが、板書しながら説明]

1. レポートと論文の違い (博士論文執筆の際に、特に重要なこと)

▽レポート：これまでに勉強したこと (=先人のやったことをまとめた) が中心。

▽論文：「私はこういう新しいことをした」 (=創造、生み出す) ということが中心。

★論文執筆の作業を図式化すると以下のようになる。



2. 「生み出す」方法

▽タイプ1：データ積み上げ型

▽タイプ2：仮説検証型

▽ タイプ3：ある仮説を設定するものの作業をしながら落としどころを探していく型

タイプ1	タイプ2	タイプ3
データ1 データ2 データ3… ↓ ↓ ↓ ゴール	ゴール ↓ ↓ ↓ データ1 データ2 データ3…	仮ゴール ↓ データ1 データ2 データ3… ↓ 本ゴール

★タイプ1、タイプ2は理想モデルだが、現実的にはタイプ3になることが多い。

3. 論文のアプローチ

- A. 伝統的なアプローチ … 歴史研究 (一次資料)、理論研究など
- B. 経験したものを従来の理論枠組みで提示 … 楽曲分析、演奏法
- C. 経験そのものを新しい言葉で客観的に記述する
  - ・自分が感じたことを理論化する (当事者研究)
  - ・ (自分が感じたことを土台に) 他者を通じて記述する (人類学的アプローチ)

★従来の枠の中で勝負するタイプA、枠自体を作りながら勝負するのがタイプC、その中間がB。論文といふとタイプAだけを思い浮かべがちだが、タイプBやタイプCを検討してみてもよいのではないだろうか。

1. 研究の早い段階で情報収集を始める。
  - ・図書館のデータベースを利用する。
  - ・事典項目の文献表や作品表を参照する。
  
2. 文献表を作成する。
  - ・文献の書誌情報を一覧表にし、常に情報を整理しておく。
  - ・書式については『論文作成の手引き』他を参照。
  
3. 資料を入手する。
  - ・図書館にない場合は、ILL (Inter-library Loan) を利用する。
  - ・図書館に購入希望を出す。
  - ・他大学の図書館を訪問する。

**東京芸術大学附属図書館**  
 Tokyo National University of Fine Arts and Music. Library

Last updated: 2008-12-03

**OPAC** 芸大図書館蔵  
書検索

お知らせ

- ・開館時間変更と休館のお知らせ(年末年始)(2008-12-03)
- 上野本館  
開館時間変更:12月22日(月)～24日(水)9:00-17:00  
休館:12月25日(木)～1月4日(日)  
取手分室  
開館時間変更:12月19日(金)～24日(水)9:00-17:00  
休館:12月25日(木)～1月5日(月)
- ・貴重資料展開催について  
(2008-09-29)  
貴重資料展「輝く書物—中世写本ファクシミリ選—」を開催します。[詳細]  
会期:平成20年10月27日(月)～12月20日(土)

上野本館の開館日

取手分室の開館日

サイトマップ

**蔵書検索**

**OPAC** 芸大図書館蔵書検索

- ・携帯版OPACガイド (準備中)
- ・NACSIS Webcat / WebcatPlus
- ・国立国会図書館蔵書検索

**コレクション**

- ・貴重資料紹介
- ・貴重資料画像データベース
- ・芸大紀要
- ・芸大教員アーカイヴ
- ・美術博士学位論文リスト
- ・音楽博士学位論文リスト
- ・芸大版!学生にすすめたい本 2004

**データベース** 学内限定アクセス

**利用案内**

- ・図書館案内 (学内の方へ)
- ・図書館案内 (学外の方へ)
- ・Library Guide (In English)
- ・FAQ (よくある質問)

**オンラインサービス** 学内者専用

- ・My ポータル [ Guide ]
- ♪ASKサービス(質問要望受付)
- ♪図書購入依頼
- ♪ILL(文献複写・貸借)依頼
- ♪予約・貸出照会などのページ
- ・利用者情報確認・変更 [ Guide ]
- ♪パスワード変更
- ♪利用者情報確認 のページ

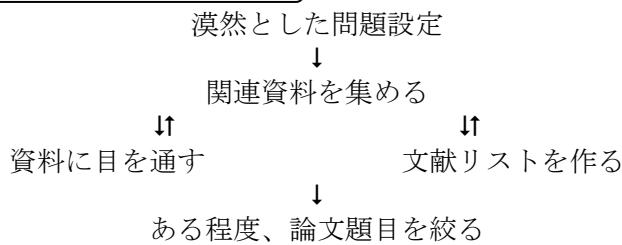
**電子ジャーナル・オンライン辞書**  
学内限定アクセス

✓ \*データベース・メニュー\*

- [General] MAGAZINEPLUS 雑誌記事索引
- [General] ProQuest Digital Dissertations 人文系学位論文
- [Art] Art Index
- [Art] BHA : Bibliography of the History of Art
- [Art] International Repertory of the Literature of Art
- [Art] Repertoire d'Art et d'Archéologie
- [Music] International Index to Music Periodicals
- [Music] Music Index
- [Music] RILM Abstracts of Music Literature
- [Music] Naxos Music Library

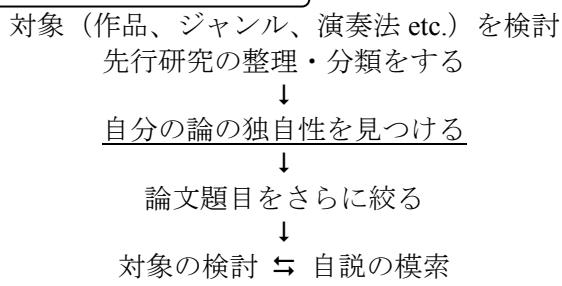
- 42 -

## 第1段階：論文題目の仮作成



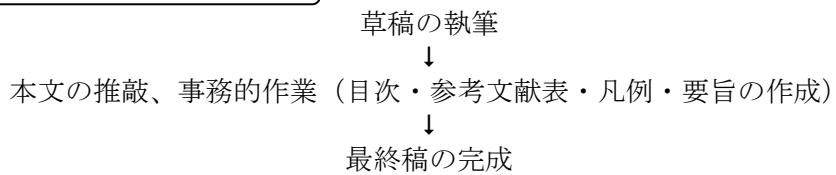
\*論文の題目を暫定的に決める

## 第2段階：論の独自性を見つける



- \*「何が」「どこまで」研究されているか
- \*自分が一番言いたいことは何か
- \*それを主張するためには、どういうプロセスで説得するのがよいか
- \*論の独自性を見つめ、それが結論になるように論を組み立てる

## 第3段階：論文の執筆

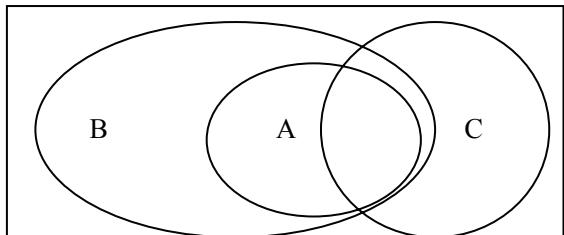


- \*取り掛かりやすい章から書き進める
- \*書き進める中で、論の構成は変わりうる
- \*最終的な題目（・副題）を決定する（本論の流れ、結論とうまく合致しているか注意）

\*書きたいことを箇条書きにしてみる

EX.

\*歴史に関すること



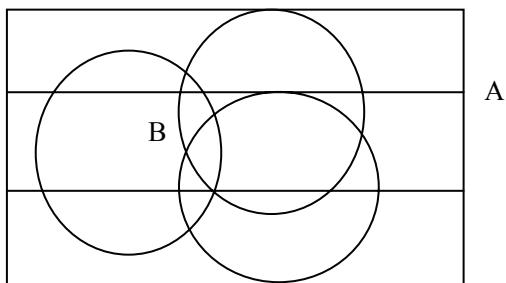
A : 直接対象となるものの歴史

B : 直接の対象を含む全体のジャンルなどの歴史

C : 隣接するジャンルの歴史

→ 述べる必要があるかどうか  
どのような順番で何を述べるか

\*先行研究に関すること



A : 時代別?

B : 方法論別?

→ 研究対象の歴史との関連について述べる必要があるか  
どのように提示するか

### 【独自性】

\*方法論・資料について

→ どのように提示するか  
先行研究の中での位置づけ



章立てにあたって

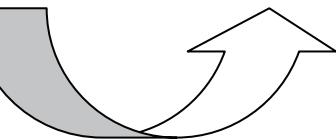
- ◆必要なもの  
不必要なもの  
不足しているもの

- ◆それぞれの規模を考える  
章にするか・節にするか  
分割して二章に分けるか

- ◆再グループ化  
グループ化の方法を変えてみる

- ◆提示する順序を考える

- ◆章立て◆



### 【主論・独自性】

\*具体的な分析

→ 何を述べるのか  
どのような順番で述べるか  
先行研究の中での位置づけ

## **論理的な文章を書くには**

一章

何を言いたいのか

それを言うためには何が必要か

↓

一節

何を言いたいのか

それを言うためには何が必要か

↓

一項

何を言いたいのか

それを言うためには何が必要か

↓

一段落

何を言いたいのか

それを言うためには何が必要か

一つの段落の中で思いつくままに話題を提供しない！

↓

一文

ひとつの文章でたくさんのことと言わない！

わからなくなったら・・・

そこで何を伝えたいのか書き出してみる

書き出したものがたくさんあつたら、章立てと同様に必要性・グループ化・順序について考える  
まとまりを作つて、段落構成を考える

文と文のつながり・段落と段落のつながりには・・・

接続詞をうまく使う

順接：そして・また

逆接：しかし・しかしながら・けれども・だが・それでも・～にもかかわらず・確かに～だが

追加：さらに・そのうえ・加えて・同様に・なお

話題転換：さて・ところで・次に

言い換え：つまり・すなはち・言わば

例：例えば・～の例を考えてみると・～など・具体的には

強調：特に・とりわけ・殊に

視点：～については・～の点では・～に関しては

状況：～の場合は・～の状況においては・～に関係なく・なお、～の場合は

要約：要するに・端的に言えば

基本：一般的には・基本的には・本来は・原則として

参照：これまで述べてきたように・上記のように・先述のように・このように・既に見たように

順序：はじめに、次に、最後に・第一に、第二に、第三に

その他：いずれにせよ・したがつて・実際には・概して

## 書式の統一

書式は統一させること

### 参考文献

- ・東京芸術大学音楽学部『論文作成の手引き』2003年
- ・日本音楽学会機関誌『音楽学』「書式の原則」2006年、など

補足——インターネット上の情報の扱いについて

- ・執筆者が匿名のものは不適切（Wikipediaなど）
- 研究論文の参照先として適した情報かどうか、その都度、判断が必要
- ・URLの掲載方法

著者名、記事の表題、サイト名（データベース名）、出版年月日、アクセス日、〈URL〉

（『学術論文の技法 新訂版』斎藤孝、西岡達裕、日本エディタースクール出版部、2005年、p.150-151。）

例) 日本音楽学会「書式の原則」、日本音楽学会機関誌『音楽学』、2006年2月19日、2008年12月8日〈<http://www.soc.nii.ac.jp/msj4/bulletin/msjstyles/pdf>〉

## 引用について

- ・参考文献から文章をそのまま書き写し、自分の文章のように扱ってしまうこと  
＝剽窃＝知的財産の泥棒
- ・どういうときに引用するか：マナーの問題

### 1. 引用の仕方

#### ①依拠

例) 前田愛によると「森鷗外は時と所の座標軸をシッカリ定めておいてから小説を書きはじめる人だった」という。<sup>1</sup>

脚注：1 前田愛「幻影の街—文学の都市を歩く—」、岩波書店、2006年、19ページ（初版：小学館、1986年）。

\*各自決めた書式にならって引用注をつけること

#### ②「 」で引用箇所を明記

例) これは先述の「最も実態に即した」分類に属するものであろう。<sup>1</sup>

脚注：1 景山正隆『歌舞伎音楽の研究—国文学の視点—』、新典社、1992年、89ページ。

\*各自決めた書式にならって引用注をつけること

#### ③長い引用 段落替え（一行開け・三文字下げ）

\*各自決めた書式にならって引用注をつけること

\*いずれも注のつけ方は、上記参考文献を参照のこと

### 2. 孫引き引用

- ・注意点：できる限り、一次資料を自分で確認するほうが望ましい。ただし、どうしても一次資料にあたれない場合は、それを引用（or 翻訳）している二次文献を参照文献とし、引用注や「参考文献一覧」には両方の書誌を残す。

#### ・引用注の例

Diaghilev, Sergey Pavlovich. "Pis'mo v redaktsiyu." *Birzheviye vedomosti*. 1913 February 4. (Taruskin, Richard. *Stravinsky and the Russian Traditions: A Biography of the Works through Mavra*. Berkery: University of California Press, 1996. pp.1044 を参照)

## 博論執筆のスケジュール

[担当：平井真希子]

提出締切 10月10日頃 審査事前承認願書提出 4月30日

進捗状況報告書 1月末（主任指導教員の先生に博論執筆の許可をいただく）

### 1. 論文執筆の構想

- ・どんな主題について、どんな方法で研究し、どんな結論が予想されるのか
- ・事前承認願書提出時には3～5行で書けるようにしておく

### 2. 論文の材料集め

- ・1次資料のコピー、参考文献、録音録画資料、楽曲分析、実験結果、フィールドワークノート、その他
- ・「頭の中」にしかないものは集めたことにならない

### 3. 実際の執筆

- ・最短記録は？ 標準的な日数は？
- ・事故に注意
- ・「本文」以外の部分にも意外と時間がかかる

平成20年度 東京藝術大学大学院音楽研究科（博士後期課程）

学位（課程博士）審査事前承認願書

出 現 者： 平成 年度入学 研究領域（ ）

既否及付番号 第 号

学籍番号： 氏名 \_\_\_\_\_

出 現 者： 平成 年度入学 研究領域（ ）

学籍番号： 氏名 \_\_\_\_\_

本籍（都道府県名）\_\_\_\_\_ 生年月日：昭和 年 月 日生  
(※外国人留学生は国藉)

専攻科目：作曲・演習・論文 (○で囲むこと。)

専攻科目：器楽・声楽・楽器(○で囲むこと。)  
第一の主専攻は併せてする。

東京藝術大学大学院音楽研究科長 署

平成 年 月 日

主任指導教員署名

氏名 \_\_\_\_\_ 署

論文等の題目	
冊目	論文等の記入欄
作品名	見本
曲の題	
曲内容	
題目	
論文	
摘要	
概要	

## 資料7. 平成20年度個別サポート状況資料

\*各院生のリサーチセンター利用状況について以下にまとめた。

\*今年度リサーチセンターで論文執筆サポートの対象となった実技系博士課程の院生は総勢41名。

\*サポート延べ回数221回、延べ時間303時間12分、メール延べ回数215回。

学年	研究領域	5月15日 説明会出欠	12月8日 説明会出欠	面談回数	面談時間	メール回数	サポート備考
1	[REDACTED]	出席	出席	7回	4時間39分	0回	
1	[REDACTED]	出席	欠席	5回	6時間 0分	事務連絡のみ	
1	[REDACTED]	欠席	出席	10回	17時間 5分	4回	
1	[REDACTED]	出席	欠席	0回	0時間 0分	1回	
1	[REDACTED]	欠席	出席	1回	2時間10分	0回	
1	[REDACTED]	欠席	出席	1回	1時間 0分	事務連絡のみ	
1	[REDACTED]	出席	出席	12回	12時間45分	11回	
1	[REDACTED]	欠席	出席	16回	16時間45分	1回	
1	[REDACTED]	出席	出席	3回	4時間45分	2回	
2	[REDACTED]	欠席	出席	2回	2時間 0分	事務連絡のみ	
2	[REDACTED]	欠席	欠席	7回	10時間45分	1回	
2	[REDACTED]	出席	出席	11回	15時間10分	12回	
2	[REDACTED]	出席	出席	8回	8時間42分	8回	
2	[REDACTED]	出席	出席	0回	0時間 0分	事務連絡のみ	
2	[REDACTED]	出席	欠席	0回	0時間 0分	0回	
2	[REDACTED]	欠席	出席	0回	0時間 0分	0回	
2	[REDACTED]	出席	出席	4回	3時間37分	1回	
2	[REDACTED]	欠席	出席	14回	8時間57分	0回	
3	[REDACTED]	出席	出席	5回	6時間11分	11回	
3	[REDACTED]	欠席	欠席	8回	8時間30分	22回	[REDACTED]
3	[REDACTED]	出席	出席	2回	3時間20分	2回	
3	[REDACTED]	出席	出席	1回	0時間40分	3回	
3	[REDACTED]	出席	欠席	6回	8時間40分	20回	[REDACTED]
4	[REDACTED]	欠席	出席	1回	1時間 0分	0回	[REDACTED]
4	[REDACTED]	出席	欠席	8回	14時間 0分	10回	[REDACTED]
4	[REDACTED]	出席	出席	0回	0時間 0分	1回	
4	[REDACTED]	欠席	欠席	1回	0時間30分	0回	[REDACTED]
4	[REDACTED]	欠席	欠席	4回	8時間30分	1回	[REDACTED]
4	[REDACTED]	出席	出席	6回	5時間35分	事務連絡のみ	
4	[REDACTED]	欠席	出席	7回	14時間45分	6回	
4	[REDACTED]	出席	欠席	18回	26時間22分	22回	[REDACTED]
5	[REDACTED]	欠席	欠席	2回	3時間5分	4回	
5	[REDACTED]	出席	出席	6回	10時間46分	2回	
5	[REDACTED]	欠席	欠席	0回	0時間 0分	0回	[REDACTED]
5	[REDACTED]	出席	欠席	11回	11時間40分	0回(FAXで2回)	
5	[REDACTED]	欠席	欠席	0回	0時間 0分	1回	
5	[REDACTED]	欠席	欠席	12回	27時間30分	20回	[REDACTED]
5	[REDACTED]	出席	欠席	8回	6時間40分	14回	[REDACTED]
6	[REDACTED]	出席	欠席	8回	23時間 0分	9回	[REDACTED]
6	[REDACTED]	出席	欠席	3回	4時間53分	12回	[REDACTED]
7	[REDACTED]	欠席	欠席	3回	4時間15分	13回	[REDACTED]

## 資料8. 東京芸術大学大学院音楽研究科リサーチセンター

### 2008年度博士論文提出者サポート報告

中村美亜（特別研究員）

音楽研究科リサーチセンターでは、2008年度に博士論文を提出した10人に対して4人の特別研究員（以下、スタッフ）がサポートをおこなった。本報告は、これら10人へのサポートを通じて浮かびあがってきた問題点、有効と思われた対処法、今後の課題を記す。

（2009年度以降の論文提出予定者については、サポート回数や内容に関して大きなばらつきがあるため、考察の参考に留めることにした。）

本報告は、まず、論文サポートに関するリサーチセンターの事前方針と実際について述べる（第1節）。ここでは、筆者が担当した3人（以下A、B、Cさん）へのサポートを中心に記述を進めるが、他の論文提出者6人（D、E、F、G、H、I、J）についても、各スタッフ（中田朱美、平井真希子、土田牧子）からのレポートをもとに言及する。

次に、筆者個人のサポート体験を振り返りながら、実技系博士論文の執筆段階で学生から聞かれる「自分が論文で『書きたいこと』がよくわからない」という問題に対し、これまで顕在化してこなかった要因を指摘する（第2節）。ここでは特に、論文全体のフォーマットに関する点、「客観的事実」と「考察」の切り分けに関する点について述べる。

最後に、初年度の活動を通じて、各スタッフから提起された今後の課題を報告する（第3節）。具体的には、進捗状況報告書の運用方法を含む中長期的サポート、（邦楽専攻学生など）現在のテーマを扱う場合に必要なフィールドワークの手法や研究倫理に関するサポートなどについて現状報告と検討事項を記す。

尚、サポート内容の具体的な内容については、執筆者のプライバシーに配慮し、公開に関して差し支えないと判断された範囲で記述することにした。また、本報告はあくまで2008年度が終わった時点での中間報告であり、今後の議論のたたき台として活用されることを念頭に書かれたものであることを附記しておく。

## 1. 論文サポートの方針と実際

論文サポートを開始する際に、リサーチセンターのスタッフで共有された基本方針として、「執筆内容については、あくまで執筆者本人が責任をもつこととし、スタッフは執筆者の話を聞きながら、論文を仕上げるサポートに徹する」というものがあった。つまり、論文はあくまで執筆者自身のものなので、スタッフが文章を書いたり、本人を介せずに指導教員と相談し論文内容について決定をくだすことはしないということだった。筆者自身、これらの方針を維持するよう努めたが、実際には、執筆者自身が論文で《書きたいこと》を見失ってしまっていることも多く、その場合、サポートは非常に困難だった。

4人のスタッフが担当した10人の論文執筆者を大別すると、《書きたいこと》が比較的明確であり、論文執筆準備が進んでいるが、それを論文化するところでサポートが必要だったタイプと、作業が思うように進まず《書きたいこと》自体を見失っているタイプがあった。前者のタイプがC、D、E、H、I、Jさん、後者がA、B、F、Gさんである。

前者のタイプに属するC、Dさんは、《書きたいこと》を明確に自覚し、論文執筆の準備を周到に続けてきた。実際、既に相当量の草稿が書かれていたが、どのような構成に仕上げていったらよいかわからず苦慮していた。また、E、Jさんの場合は、論文執筆に必要な情報は揃っていたが、それが広範に及んでいたため、どのようにまとめていったらよいかわからず、うまく書き出していけない状況だった。その一方で、H、Iさんは、一般大学の文系学部卒業後、芸術系に転じた学生であったためか、自分自身の主張を言語化するという点では大きな問題はなかった。しかし、自分のつかんだポイントをその他の多くの情報と関連づけ一つの流れとしてまとめるところでサポートが必要だったという点で、C、D、E、Jさんのケースと共通の問題を抱えていた。スタッフは、執筆学生の考えていることを洗いざらい聞き、テーマごとに内容を区分しながら全体の構成を練り直す作業に相当の時間をつぎ込んだ。

後者のタイプに属するA、B、F、Gさんは、もう一つ手前の段階で作業が滞っていた。連日の演奏活動が多忙を極めていること、博士入学時の構想が壮大であったこと、博士入学後に問題点をうまく絞りこんでいけなかつしたことなどの複数の要因があった。これらの《書きたいこと》を見失ってしまったケースでは、進む方向自体がわからないため、スタ

ツフも何をサポートしたらしいか把握するのに多くの時間を費やさざるを得なかった。

筆者の担当したケースでは、執筆者のこれまでの歩みを振り返ることが、当初考えたアイディアを思い出したり、その延長線上で考察を深めるきっかけになったようだった。具体的には、譜読みから曲を仕上げ公開演奏にもつていくまでのプロセスや、これまでの教育体験や演奏経験に関する質問をし、それらを文章にしてもらいながら、執筆者が表現したかったことが何かを探った。それらの中で重要と思われたことに関しては、口頭や（再度、あるいは再々度）文章で詳細に言語化するよう促した。これらの対話の中から、執筆者は、それぞれの《書きたいこと》を形にし、それを表現できるようになっていった。これは時間のかかる作業ではあるが、いったん言語化されると、執筆の作業速度は飛躍的に向上した。

いずれの場合も、この段階を経て、ようやく論文の構成や論理展開についてのサポートとなるが、この時点で既に多くの時間を費やしてしまったため、各執筆者が《書きたいこと》を論文にするためにどのような表現の可能性があるのか、筆者がむしろ積極的に提案せざるを得なかった。論文の文章そのものを示すということではなかったが、執筆者の言ったことを筆者が言い換えたり、「それを言うためには、このような論理構成にしてはどうか」と選択肢を提示することが多かった。執筆者は筆者が選択肢を示す中から、自分に見合った表現を見つけ、それらを膨らませて言語化していくのが現実的に有効であったようだ。ただし、この時間の制約は、《書きたいこと》を見失っていたタイプに固有のことではなく、平井、中田によると、《書きたいこと》が明確なタイプでも、論文執筆に費やす時間を捻出できない場合、同様の問題が生じた。

一年のサポート活動を振り返り、サポートの流れを大まかに記述すると、以下のようになる。

[ステップ1] 執筆者の書いた論文構想を見ながら、《書きたいこと》と全体の構成に整合性があるかを検討した。

[ステップ2] 執筆者が《書きたいこと》をうまく表現できない場合は、頭の中で考えていることを具体的に言葉にしてもらったり、これまでの歩みを振り返ることで、再発見するよう促した。

[ステップ3] 執筆者が論文を通じて伝えたいということが言語化されたら、それをどのような論理構成や語りのパターンに載せるかを検討した。論文全体の構成や、各章の効果的な論理展開については、スタッフから可能性を提示したり、場合によつては、執筆者の描く《書きたいこと》を表現するのに適切と思われるフォーマットを積極的に提案した。

[ステップ4] 論旨の展開、分析の解釈、文章表現などに大きな矛盾があつた場合には、それらの点を指摘し修正を促した。その際、筆者自身が執筆者に代わつて論文の内容を決定したり、文章そのものを記述することはしなかつた。

以上を一言でいうなら、論文の主題や目的に関して筆者は決定をおこなわず脇役に徹するが、いったんそれらが決まつたら、論文という形式での効果的な提示方法を提案するということになるだろう。一言つけ加えるなら、どの段階においても、口頭でのやりとりよりも、執筆予定者に文章を書いてもらって、それに基づきディスカッションをするという形をとる方が効果的であった。しかし、執筆者が十分な時間を割くことができない場合は、ステップ3以降のサポートが十分できないケースもあつた。

## 2. 論文執筆に関する新たな阻害要因

前述したように、論文を書いているうちに（あるいは、書き始めると）《書きたいこと》を見失う傾向があるのは、論文執筆の進み具合に関わらず、筆者がサポートをした三人に共通した問題だった。こうした状況が生じる要因として、これまで「言葉で表現することに慣れていない」、「分析や作品解釈についての訓練がされていない」と言われてきた。実際にそのような要因が存在したことは否定できないが、これらに加えて（1）「論文はこうあるべきだ」と思っているフォーマットに無理にあてはめて考えようとしているということ、（2）「客観的事実」と「考察」がうまく切り分けられないということがあつた。

### 2.1. 論文フォーマット

一点めに關していくれば、（筆者もこのサポート作業を通じて知ったことだが）「作曲家作品研究」という言葉で表現されている独特的論文定型が存在しており、「それが（唯一の）論文のあり方」だと、執筆者が思い込んでいる傾向があることだった。「作曲家作品研究」というのは、論文で対象とする作品の歴史的コンテクストを調べ、一般的な方法で作品分析（あるいは作品間の比較）及び歌詞解釈をすれば、結論が導き出されるというもののようである（下記参照）。

- 1) 序章
- 2) 作品の成立史
- 3) 作品分析
- 4) 結論

もちろん、この定型で論文がうまく仕上がる場合も数多く存在する。実際、中田・平井が担当した中には、このフォーマットが適切だったこともあった。しかし、筆者が担当したAさんやBさんの場合は、それがうまく応用できそうにないテーマであったにも拘わらず、このフォーマットに無理矢理あてはめようとしてしまったため、執筆者の言いたかった結論に到達できずにいた。

筆者がサポートを始めた時、AさんとBさんは、音楽作品の歴史的コンテクストを調べ、一般的な分析方法を用いて作品を分析すれば（あるいは楽曲を比較すれば）、自らの音楽解釈の正当性や、当該音楽作品の独自性が明らかになると話していたが、AさんやBさんが（曖昧な形であったにせよ）《書きたいこと》として筆者に語っていた内容と整合性はなく、やがて矛盾が生じてくることは容易に想像できた。もし上記のフォーマットに無理にあてはめ、論文を書き続けていった場合には、おそらく、論文の大半で書かれた内容と結論が一致しない論理的に破綻したものになるか、逆に論理的に破綻のないように書いた場合には、執筆者が論じたかった結論に到達しないまま終わってしまうと予測された。（このどちらかの結果が頻繁に生じるため、「論文を書いても、演奏には役に立たない」と言われることがあるのかもしれない。）

現に、最初の数回のサポートで筆者は「そのように進めていっても、Aさん、Bさんの

望むような結論が出ないのでないか」という主旨の発言を繰り返さざるを得なかった。「何について書きたいのか」と質問をしても、あまりにも漠然とした構想説明や、すでに広く知られている「歴史的事実」を復唱する応答があるのみだった。Aさん、Bさんはひどく混乱し、自分には論文を書く能力がない、自分の言いたいことがわからないと行き詰まり感を覚えていたようだった。

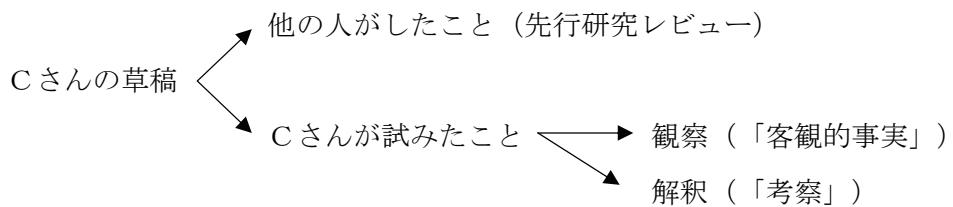
しかし、後から振り返ると、実際には、論文を書くに値する内容がないのでは決してなく、Aさんの場合は、それをどのように言語化し、どんな論理構成で説明したらよいかわからなかったのであり、Bさんの場合は、論文に書きたいと思っていた内容と、その際に言葉によって表された内容の間に齟齬があったのだった。この齟齬については、Bさん自身が気づいていなかったため、筆者としても初期の段階では対処できなかった。

Aさん、Bさんが《書きたいこと》は、何度も文章を書き直していく過程、何度も話し合いをする過程で、徐々に言葉になり、アイディア自体が結晶化していった。特に効果があったのは、普段の練習方法や、これまでの教育体験や演奏経験について質問をし、口頭で応えてももらったり、文章にしてもらいながら、何を言おうとしているかを考えることだった。自分の体験を振り返りながら、どういうプロセスを経て現在の演奏スタイルを確立したり、（特定の作品に対する）音楽観が芽生えてきたことかを考え直すことで、執筆者は《書きたいこと》を発見していった。別の言い方をするなら、「物語の再構築」ということになるだろう（参考：野家 2003）。

## 2.2. 「客観的事実」と「考察」

一方、Cさんの場合は、上記Aさん、Bさんとは状況が異なっているように思われた。それは、Cさんの扱う内容が、作品研究や演奏論ではなく、演奏をする際の身体の動きや心理だったからである。Cさんは、そのためにさまざまな試みを既におこない、論文執筆の材料となる独自データも相当量蓄積していた。Cさんの問題は、これらのデータをどのように提示するか苦慮していた点にあった。Cさん自身「これでは単に自分の主張をダラダラと書いているのに過ぎないので」不安そうに話していた。つまり、どうすれば論文としての体裁を保ちながら、自分の《書きたいこと》を表現できるかわからず困っていたのである。

筆者がCさんの草稿を読んでまず感じたのは、先行研究とCさんの観察・実験データおよびCさんの解釈が区別されないまま、渾然一体となって書かれていたことだった。これでは論文の読者に、当該分野の研究におけるCさんの貢献がどこにあるのかわからない。この時点では、筆者にもそれらの判別がつかなかつたし、Cさん自身も混乱していた。そこで、〈他の人がしたこと〉と〈Cさんが試みたこと〉を分けるよう促した。さらに、後者の〈Cさんが試みたこと〉でも、〈観察したこと〉と、それについて〈解釈した〉ことを分けるようにアドバイスした。これが、先に挙げた阻害要因の二点め、「客観的事実」と「考察」がうまく切り分けられないということである。



この作業では、論文自体の構成を、次のような構成に組み立て直すように提案したことが、効果的だったようだ。

- 1) 先行研究レビュー
- 2) 方法論の検討
- 3) 観察／分析
- 4) 考察

周知のように、上記は自然科学や社会科学など実証科学系の論文でよく使われる論文フォーマットである。このフォーマットにあてはめることで、「客観的事実」と「考察」を比較的容易に分離して記述することができるようになった。また、現在の演奏実践や演奏教育の中でのCさんの研究の位置づけや意義も明瞭になった。

ところが、このように「客観的事実」と「考察」が混同されて記述されるのは、Cさん特有のことではなく、その後、AさんやBさんも抱えることになる共通の問題だった。こ

れは、三人がふだん論文を書き慣れていないということもあったが、演奏という行為そのものが、分析／解釈／表現が一体化していることとも関連性があるのかもしれない。実際、翻ってみれば「客観的事実」と「考察」は、一般に考えられているようにアприオリに分離しているものではなく、論文執筆者が意識的に切り分けてはじめて異なるものとして現れてくる。論文執筆やそのサポートにあたっては、このことを再認識することが重要だろう。

これに関するとして、実技の現場では、音楽学や人文系学術領域とは異なる言葉の用いられ方をしているという問題があった。例えば、“正しい演奏” “いい演奏” “独自性”という言葉は、客観的であると同時に主観的でもある言葉として使われていた。また、演奏の現場でよく使われる“調性” “フレーズ” “協和”なども、時と場合によりさまざまな含意があるようだった。論文を書く際には、これらの言葉に対して、状況に応じて別の表現に当てはめ、「客観的事実」と「考察」に切り分けながら書いていく必要が生じた。

以上に関して、筆者が今年度サポートした三人のケースを現時点から振り返り、抽象的にまとめるなら、次のようになる。

1. 《書きたいこと》は、執筆者が自分の体験を振り返りつつ、再物語化を繰り返すうちに結晶化していく。
2. 《書きたいこと》は、それを書く方法を見つけることとも関わっている。
3. その過程では、「客観的事実」と「考察」という二分化を意識的におこなう必要がある。

表現行為は、それが作曲や演奏であれ、論文執筆であれ、伝える内容と手段が切り離されているわけではない。論文執筆という作業も、何かを伝えるためにはどのような手段を用いるか、そして、その手段を用いながら何を伝えることができるのかを模索していくことと捉えられる。この過程では、当然、執筆者自身が創作や演奏の場で実践してきたこと（あるいは現在試みていること）と、論文を執筆するという作業の間の行き来をし、その関係を一つの語りとして捉え直すことが重要にある。こうした見方をとるなら、論文を書くというのは、創作・演奏と全く別の知的活動ではなく、むしろ、創作・演奏活動そのものを

別の視点から掘り下げていく創造行為に他ならないと言えるのではないだろうか。

### 3. 総括と今後の課題

リサーチセンターでは、論文サポートをする際に「実技系博士課程の学生は、《書きたいこと》がないのではなく、《書きたいこと》をうまく言語化・理論化することができないのだろう」という立場を取りながらサポートをおこなった。その結果、《書きたいこと》がうまく表現できない新たな要因として、《書きたいこと》の内容如何にかかわらず、「作曲家作品研究」という論文フォーマットをあてはめようとするため、それがうまく現れ出てこない傾向がある点、研究主題に関連して〈すでに知られていること〉と〈執筆者自身が取り組んだこと〉と〈そこから導き出した成果〉を峻別しないために、実は、執筆者が独自の試みや考察をしていても、自分自身でそれに気がつかないという状況が生じている点が示唆された。

また、今後検討が必要な問題として、音楽の実践現場と学術領域でしばしば見られる語彙の相違ということがあった。サポートの現場では「語彙の違い」として顕在化したが、翻って考えれば、これは単に語彙に限らず、その背景にあるディシプリン（専門分野・鍛錬）を成立させる根幹の思想にもかかわることとも考えられる。実技系の論文が包含する領域が、音楽学にとどまらず、非常に広範囲に及ぶということも踏まえるなら、実技系論文の学際性について検証する必要が生じてくる。これに関しては、既成の各ディシプリンの方法論的特質を抽出し、それをつないでいくことが鍵になると思われる（オカーシャ2008；特に、日本語版に付された“分野どうしをつなぐための科学の哲学”に関する記述）。この作業を通じて、実技系論文における先行研究レビューの射程も見えてくるのかもしれない。

筆者以外のスタッフからは、今後の課題として、以下のような点が提示された。中田からは、執筆者がすでに相当量の草稿を書いている場合、スタッフからの論文構成や論理展開の破綻に関する指摘に対して、それをすぐに受け入れることができない場合があったという報告があった。これは、中長期的な論文執筆計画の見直しとともに、実技系論文のも

つ独自性や学際性についても併せて考えていく必要があるだろう。

さらに中田・平井の二人から、多忙な学生へのサポート、論文の「構成力」を引き出すためのサポートについて、さらなる検討の必要性が示された。これらについては、進捗状況報告書・年次研究計画書の運用状況を検証することと関連させて考えていくのが有効かもしれない。例えば、博士リサイタル後の指導教員会議の内容をもとに、次年度の研究目標を（暫定的だとしても）具体的に提示し、それを達成するために有効と考えられる方法やスケジュールを進捗状況報告書・年次研究計画書に記入していくことはできないだろうか。その際には、書式の再検討も視野に入れる必要が出てくることも考えられる。（参考：トヨタ財団の研究助成申請書では、「プロジェクト形式」の研究計画が求められている。博士リサイタルを一つの“プロジェクト”と考えれば、このような書式や記入手順を参考にすることも有益かもしれない。）

一方で、土田からは、現在のテーマを扱う学生が直面する問題についての報告があった。歴史資料研究とは異なり、現状調査をおこなう場合には、研究協力者との信頼関係の構築や成果発信に関する倫理的問題が生じてくる。フィールドワークの手法や研究倫理については、すでに多くの分野でノウハウが蓄積されていることでもあり、これらの基本に関するサポートも、今後避けては通れないだろう。（学生向けの入門書としては、佐藤 1992、桜井 2002などがある。また、さまざまな学会や大学が研究倫理に関するガイドラインを作成・公表しているので、それらを手がかりにするとよいのではないだろうか。）

平井からは加えて、博士課程での研究成果の学外発信や、それに対するサポート体制についての見直しが指摘された。初年度のサポート活動を通じて、提出された博士論文の中には、文章表現や論理構成に多少難があっても、中心主題が経験に裏打ちされた含蓄のあるものであり、芸術的・学術的・人間的営為の貴重な成果として社会発信に足る十分な内容をもっているものがあることが確認された。今後、論文だけでなく実技も絡めながら研究成果をどのように社会発信していくか、また、それについては、どのようなサポート体制をとっていくのかを議論していくなければならないだろう。

初年度の論文サポートは、どのスタッフにとっても試行錯誤の連続であった。しかし、「博士論文執筆は、自分の演奏や教育活動を展開していく上で大きな自信になった」という主旨の言葉を、博士論文を提出した複数の学生から受け取った。実技系学生による論

文のあり方については未知なことが多いが、それだけに、長年にわたり音楽と正面から向き合っている当事者の真摯な言語・理論化への試みは、従来の学問的言説において十分理論化されてこなかった音楽へのアプローチを提示するという点において高い学術的な価値を有する。さらに言えば、それは“音楽と人との関わり”に関する洞察の一端を詳らかにしたものであり、本大学における教育・研究成果の社会発信という点で重要な役割を担うことが今後期待される。

## 文献表

- オカーシャ、サミール 2008 『科学哲学』 廣瀬覚訳、直江清隆解説、岩波書店.
- 桜井厚 2002 『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』 せりか書房.
- 佐藤郁哉 1992 『フィールドワーク』 新曜社.
- 野家啓一 2003 「物語行為による世界制作」、『思想』（10月号） [=2005 『物語の哲学』  
(増補新編) 岩波現代文庫] .

## 資料9. 平成20年度学位申請論文提出者に向けてのアンケート

2008年12月8日開催の音楽研究科リサーチセンター論文執筆説明会に向けて、すでに10月に論文を提出した院生7名に、論文執筆に関するアンケートを行う。(7名中5名より回答)

さらに、2009年4月に入ってから2009年3月までに提出した3名に対し同様のアンケートを行う。(3名中1名より回答)

### 論文執筆に関するアンケート

#### ◆論文の執筆に関連して

主題・論文題目は、何時ごろ、どのようにして決めましたか。

資料の収集はどのようにして行いましたか。

論文執筆にあたって苦労した点。

#### ◆リサーチセンターのサポートについて

リサーチセンターのサポートはどのようなところで役に立ちましたか。

リサーチセンターのサポートにさらにどのような点を望みますか。

#### ◆今後論文を書く後輩に伝えたいこと、アドバイスなどお願いします。

◆リサーチセンターでは、研究成果を発表する場として、論文を執筆された方々によるレクチャー・コンサートのようなものも考えていきたいと思っていますが、こうした企画に関心がおありですか。

♪ご協力ありがとうございました♪

## アンケート結果

### ◇主題・論文題目を決めた時期など

- 主題は博士課程入学時すでに決定していた例が多い。修士課程で興味を持った内容、修論内容の掘り下げなどをめざす。
- 論文題目の決定は博士課程1年次、論文の構成が定まってから、論文執筆の最終段階など様々。
- 執筆年度初めに学位審査演奏会での演奏曲目を決めた時点で論文題目、内容が具体化した例も。

### ◇資料の収集方法

- 芸大図書館の資料、国内外の図書館・研究所などの資料（桐朋学園大学図書館・フランス国立図書館・フランクフルトのヒンデミット研究所など）。
- ネット検索（Webcat、NACSIS、大英図書館検索システム、Amazon）。
- ワークショップへの参加、レッスン実践、演奏活動など実地調査からの収集。
- 電子ジャーナルの利用方法がよくわからずあまり活用できなかった。

### ◇論文執筆にあたって苦労した点

- 論じたい、論じるべき内容を文章化すること。
- 論文全体の構成を組むこと。
- 実践的なデータの記述法 多義的な用語・概念をどう定義づけるか。
- 先行専攻研究が少なく資料収集に時間がかかった。留学のため執筆に時間がかけられなかった。
- 演奏との両立
- 演奏時に考えていることを文章化することの難しさ。
- 論文内容の的を絞りこむことに苦労した。

### ◇リサーチセンターのサポートの利用のあり方

- 対話の中で論文内容を客観視し、整理できた。
- 全体の構成、問題提起のあり方、論の進め方、文章表現などへのアドバイス。
- 実践データの記述法 書式のこと。
- 演奏する立場からの内容絞り込みの支援。
- 楽曲分析に関するアドバイス。

### ◇今後論文を書く後輩に伝えたいこと、アドバイスなど

- 早め早めに取り組むこと。
- 推敲の時間を少なくとも2週間以上とておいたほうがよい。
- できるだけ論点を絞って論じていくことが大切。論文提出までの1ヶ月は本番の予定を入れないほうが安全。
- 論文執筆は慣れない作業なので、自分にとってどのようなサポートが必要なのか、どこで必要なサポートが得られるのか見つけることは、とても大事。
- 何故この道（私の場合、ピアノと声楽）に進んだのか、習い始めてから今現在までの自分史や、

この曲のどういうところが好きか等、とにかく沢山沢山書かされたことが物凄く役に立ち、結果段々形になっていったので、考えるよりもまずはどんどん書いてみるとよい。一見、論文と関係なさそうなことでも、最終的にはつながってくることもある。

○演奏する曲目を早めに決定すること。早めに取り組み文章を書くことに慣れる。

◇レクチャー・コンサート企画への関心

○回答者全員が企画に関心ありとの回答。

## 資料 10. 平成 20 年度リサーチセンターサポートに関するアンケート

2008 年 4 月 27 日開催の音楽研究科リサーチセンター説明会開催時に、出欠の回答書に添えて 20 年度のサポートに関するアンケートを行う。(30 名中 14 名より回答)

リサーチセンターのサポート活動に関してお伺いします。

一対一の論文サポートについて（どちらかに○印をつけてください）

\*活用した

有益だった点:

要望したい点:

\*活用しなかった

理由:

2008 年 12 月 8 日開催のリサーチセンター説明会について（どちらかに○印をつけてください）

\*参加した

有益だった点:

要望したい点:

\*参加しなかった

理由:

その他リサーチセンターへの要望などありましたらお書きください。

御協力ありがとうございます。この内容はリサーチセンターの活動にのみ利用させていただきます。

## アンケート結果

### ◇論文サポートについて

#### 有益だった点

- どこから手をつけていいか分からぬ状態だったが、具体的な研究の進め方、文献の訳についての指導が有益だった。
- パソコンや検索の仕方の基本が教えてもらえた。文献精読のサポート、進捗サポートを定期的にしてもらえてどんどん前向きに進められた。
- 予約による指導で無駄な時間がなく、ゆとりをもって相談できた。内容についての具体的な方法、悩みを直接話してアドバイスを受けることでセンターに行くために研究を進めなくてはならないという動機づけになった。
- 執筆を計画的に進められた。論点を客観的に捉えられた。
- 材料をそろえてから書き始めるというのではなく、考えていることを毎回形にする課題によって漠然とした構想ではいけない点がわかった。具体的な論の展開の仕方が継続的なサポートの中で蓄積された。
- 一人では調べ方がわからず滞ってしまうが、アドバイスをいただき、何がやりたいのか聞き出しあれどもえた。
- 会話の中で自分が思っていることや書きたいことが少しずつ見えてきて心強い。
- 自分のしていることの何が良く、何が足りないのか指摘してもらえた。
- 基礎的なことから丁寧に指導してもらえた。言いたいことを簡潔にまとめてもらえた。
- 一対一で考えを引き出してもらえたことで、考え方や悩み、これからすべきことが明確になった。
- こまめに通うことで目標を立てて課題を仕上げていくことができた。
- 論文に詳細に目を通してもらい、不十分な点を修正できた。博論執筆を経験されていることで的確なアドバイスをいただき、精神的にも救われた。
- 一人だと行き詰ってしまうところにアドバイスをもらえた。

#### 要望

- 論文提出が迫ると時間配分ができなくなると思うので、週1回の担当者以外の方にもアドバイスいただきたい。
- リサイタルのプログラム・ノートと博論と並行して相談にのってもらいたい。
- もっと深く欠点を指摘してほしい。

### ◇説明会について

#### 有益だった点

- 学位取得までの流れが具体的にわかった。演奏系論文の在り方が理解できた。
- パソコンでの検索方法、論文構成についての具体的説明が再確認できた。
- 周りの人の進み具合など知ることができ、意見交換できた。
- 論文完成までの具体的なイメージができた。演奏系の博士学生が集まる機会がないので励みになった。
- 難しく考えていた論文執筆だったが「自分史を書く」などの入りやすいアドバイスをもらえた。

博士課程の仲間と情報交換できた。

○論文を仕上げる際の注意点がわかりやすかった。書き方の大まかな順序がわかった。

○同じ目標を持つ人が大勢いることに孤独感を感じずに済んだ。

○不安だったことがクリアになった。

#### 要望

○洋楽と邦楽では研究方法が違うので、もっと小規模のグループでの説明会などできないか。海外の論文の検索方法などはあまり関係ないので。

○担当以外の方とも一対一で意見を聞かせていただきたい。説明会を定期的に催し、情報交換できることありがたい。

○実技系学生の博士論文の意義を強く明示してほしい。

#### ◇その他の要望

○リサーチセンターにピアノがあるとよいのではないか。

○音楽だけでなく、推奨するような論文集をリサーチセンター内で閲覧、貸出できたら有益ではないか。

○悩みや混乱が多いので整理し方や細かいことも教えてほしい。

○学位審査後、論文の要修正箇所が示された場合、修正作業のアドバイスもお願いできるのか。

## **音楽研究科リサーチセンター//////平成 20 年度広報活動**

今年度、音楽研究科リサーチセンターで行った広報活動は、主に以下のとおりである。

### I . 『博士学位記録 2008』の発行準備

今年度の学位申請論文要旨、学位審査演奏会の記録、演奏会の抜粋を冊子にまとめる。  
発行は 2009 年度初めの予定。

### II . 音楽研究科リサーチセンターのパンフレット作成

音楽研究科リサーチセンター紹介のためのパンフレット作成。  
リサーチセンター内で必要部数を隨時印刷できるような形で作成する。  
→資料 11. 音楽研究科リサーチセンターパンフレット

### III . 音楽研究科リサーチセンターのホームページ開設

音楽研究科リサーチセンター紹介のためのホームページ開設。  
リサーチセンター内で隨時更新できる形にする。  
URL http://www.geidai.ac.jp/labs/mrcenter/

## 資料 11. 音楽研究科リサーチセンターパンフレット

構成員

◎ 運営委員

主任 植山哲彦（教授・音楽文芸）  
大角欣矢（准教授・楽器系）  
河野文昭（教授・器楽科弦楽講座）  
迫 昭嘉（教授・器楽科ピアノ講座）  
杉本和寛（准教授・音楽文芸）  
永井和子（教授・声楽科）  
三浦正義（教授・邦楽科）  
吉川 文（助教・音楽研究科リサーチセンター）

◎ スタッフ（□ 内は専門分野）

専任 吉川 文〔中世・ルネサンス音楽、音楽理論〕  
特別研究員 遠藤衣穂〔中世・ルネサンス音楽、教会音楽〕  
土田牧子〔日本音楽史、歌舞伎音楽〕  
中田朱美〔ロシア・ソヴィエト音楽、20世紀音楽〕  
中村英恵〔表象文化論、人間学、当事者研究、身体論〕  
平井真希子〔中世音楽〕

【2008年11月1日現在】

(博士論文執筆学生のサポート)   
(音楽系博士学位に関する調査) 

東京芸術大学 大学院  
音楽研究科リサーチセンター

Research Center of Graduate School of Music  
Tokyo University of the Arts

東京芸術大学 上野キャンパス  
〒110-8714 東京都台東区上野公園 12-8 (3号館) 1階  
Tel: 03-5525-2372 (内線: 5851)  
Fax: 03-5525-2397 (内線: 5858)  
Email: mrc-info@m.tgeidai.ac.jp  
Website: http://www.gteidai.ac.jp/labs/mrcenter



### 音楽研究科リサーチセンターとは？

東京芸術大学では、平成20年度より文部科学省特別教育研究費を得て、芸術分野における博士学位の方に関する研究を目的としたリサーチセンターを開設しました。このセンターにおいては、作品制作・演奏といった実技と研究論文との関わりや位置づけを調査・考察の対象とし、調査研究の一環として実技系博士課程学生に対する論文執筆の技術的支援も実行しています。

大学院美術研究科と音楽研究科それぞれにおいて、各分野に沿ったリサーチ活動を進めており、芸術実践と理論的研究をより有効に結びつけ、さまざまな形で社会に発信できる優れた人材を供るために、多角的なアプローチを行っています。このうち大学院音楽研究科を担当する組織が「音楽研究科リサーチセンター」です。

### 目的

音楽研究科リサーチセンターは、下記のような活動を通じて、今後の芸術分野における博士学位の方についての提言をおこなうことを目的にしています。

- ① 音楽実践と理論を結ぶ新しい学術研究の可能性を探索し、その成果を社会発信すること。
- ② これらの成果を蓄積し理論化すること。

### 活動内容

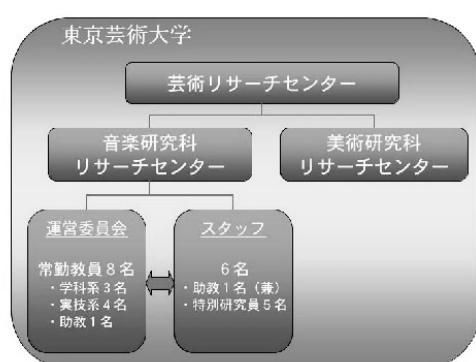
上記の目的を達成するために、音楽研究科リサーチセンターでは、次のような活動をおこなっています。

- ① 博士論文執筆生のサポート活動を通じて、実践と理論を結ぶ新しい博士論文のあり方を探ること。
- ② 博士学位取得生の成果発表（音楽作品・演奏および論文）のサポート、記録作成を通じての社会発信。

- ③ 国内外で過去に提出された音楽分野（実技系）における博士論文の調査。当大学を中心に、国内の他大学についても調査をおこなっている。特にアメリカ合衆国における、Ph.D. (Doctor of Philosophy) とは別の学位である DMA (Doctor of Musical Arts) の実態調査など。

- ④ 国内外の他大学芸術分野との相互交流を深め、意見交換をおこなうこと（来年度には、公開シンポジウムなどの開催を予定）。

### 組織図



発行部数 120 部

主な配布先 訪問調査大学、学内教員、大学院博士課程在籍者等

音楽研究科リサーチセンター////////平成20年度会合記録

音楽研究科リサーチセンター準備委員会・運営委員会記録

音楽研究科リサーチセンタースタッフ準備会合・スタッフミーティング記録

## 音楽研究科リサーチセンター準備委員会

日 時：2008年4月10日（木） 17時10分より

於：大会議室

出席委員：檜山哲彦[委員長]、杉本和寛、大角欣矢、永井和子、三浦正義

植田克己[学部長]、長岡信幸[事務長]、神永 彰[教務係長]、小寺宏治[庶務係長]

吉川 文[RC 予定スタッフ]

欠席委員：迫 昭嘉、河野文昭

### 【議題1】大学院音楽研究科リサーチセンターの設置について

芸術リサーチセンター設置に至る経緯についての説明

五ヵ年計画

芸大内での組織図案 各学部の形態

今年度、ないし来年度の具体的な活動のあり方について

リサーチセンター設置を周知すること

資料収集と調査 学内、学外（国内外）

実技系博士課程学生の論文指導サポート体制を作る

### 【議題2】関係規則の制定・改正について

芸術リサーチセンター設置にあたり関係規則の制定・改正が必要

### 【議題3】助教の採用について

吉川 文 任期：平成20年5月1日～平成23年4月30日

### 【議題4】特別研究員（非常勤講師）の採用について

平井真希子、遠藤衣穂、中村美亜、土田牧子、中田朱美

## 音楽研究科リサーチセンター運営委員会

### 第1回

日 時：2008年6月26日（木） 17時00分～18時30分

於：中会議室

出席者：檜山哲彦[委員長]、川上 茂[永井委員代理]、迫 昭嘉、河野文昭、三浦正義、大角欣矢、

杉本和寛、吉川 文

植田克己[学部長]、長岡信幸[事務長]、神永彰[教務係長]、小寺宏治[庶務係長]、

藤原 修[会計係長]、越川倫明[美術学部・オブザーバー]

### ☆リサーチセンター運営状況について

サポート状況 リサーチセンター周知のため実技系博士課程在籍者対象に説明会を開催

リサーチ状況 学内に関してはすでに提出された論文について調査中

学外については国内、海外の大学での実技系博士論文の在り方について

Web 等を利用し調査を進めている

☆21 年度概算要求の状況について

今年度の執行状況、それに合わせて来年度の概算要求をすでに提出ずみ

☆20 年度実施計画についての検討 博士学位論文の制度的検討

新制度に移行してから、論文と演奏との総合的評価の方向へ

☆学位審査演奏会について

演奏会の録音・録画とアーカイブの構築など

総合カタログの作成（プログラム、論文要旨、演奏音源を含む形）

☆リサーチセンターのサポート体制についての評価と改善

学生など対象としたアンケート、指導教員宛ての報告書へのコメントなどにより方向修正

☆講演会・シンポジウム等の開催について

国内調査とかけて各大学での問題点について意見交換

次年度以降の開催に向けての準備

☆院生・指導教員・リサーチセンターのサポートの関係

サポート状況の情報共有は非常に重要な問題 そのため報告書提出を予定

## 第2回

日 時：2009年1月15日（木） 16時00分～17時00分

於：大会議室

出席者：檜山哲彦[委員長]、多田羅迪夫[永井委員代理]、大角欣矢、杉本和寛、吉川 文

長岡信幸[事務長]、神永 彰[教務係長]、小寺宏治[庶務係長]、藤原 修[会計係長]

欠席者：永井和子委員、迫 昭嘉委員、河野文昭委員、三浦正義委員 （各委員より議長宛委任状）

☆リサーチセンターの事業について

本年度事業内容

サポート状況 実技系博士課程在籍者対象に説明会を5月と12月に開催

サポート状況の具体的な内容例として本年度論文提出者のサポート状況表

リサーチ状況 学内に関してはすでに提出された論文について調査中

実技系博士課程についてのアンケートを常勤教員対象に実施

学位審査記録のアーカイブ化

博士課程に関する記録のデータベース化

学外（国内） 実技系博士課程を有する7大学を訪問調査

各大学関係者招き意見交換会開催予定 2月20日（金）

来年度事業内容

リサーチ活動、サポート活動とも本年度緒に就いたものをさらに継続、進展させる

学位審査演奏会のリサイタル・シリーズ化

意見交換会に基づきシンポジウム開催予定等

☆予算執行状況について

☆来年度特別研究員の交替の件

☆第二期中期目標・中期計画案について

リサーチセンター事業については大学院の項目の中に含める

## 音楽研究科リサーチセンタースタッフ準備会合

日 時：2008年3月27日（木） 13時30分より

於：中会議室

出席者：檜山哲彦、杉本和寛、大角欣矢、（神永 彰教務係長 部分参加）

遠藤衣穂、土田牧子、中田朱美、中村美亜、吉川 文

欠席者：平井真希子

### 【芸術リサーチセンター】

プロジェクト立ち上げについての経緯

平成20年度 特別教育研究経費所要額調（教育改革）資料参照

実技系博士課程論文のあり方について現在の問題を解決すべく企図

美術学部より

芸術実技系博士論文について芸術大学としてのモデル提示できるように

音楽学部ではすでに平成16年度から新しい取り組みをはじめ

毎年研究進捗状況報告書の提出を求めたりしている

### 活動内容

論文作成のサポート

指導教員会議、主任指導教員と連携しながら学生サポート

演奏などと一体となった研究

様々な論文のアプローチのモデル作成

現在の体制の調査

進捗状況報告書のあり方の検証

審査そのもののあり方 外部審査

芸術実技系博士論文の外部大学でのあり方をみていく

シンポジウムなどの企画も 意見交換

### 活動報告

五カ年計画 どのような形での報告ができるか

各年度での成果の蓄積をまとめておけるように

### 今後の予定

活動のための部屋の確保、備品の準備など

情報の共有のためのメーリングリスト開設

## 大学院音楽研究科リサーチセンタースタッフミーティング

### 第1回

日 時：2008年5月1日（木） 18時00分より

於：学生オーケストラ運営室

出席者：檜山哲彦、杉本和寛、大角欣矢、

遠藤衣穂、土田牧子、中田朱美、中村美亜、平井真希子、吉川 文

☆大学院音楽研究科リサーチセンターの今後の業務の確認

リサーチセンターにおける「学位授与プロセスの研究」について

☆博論執筆に対するサポート体制について

院生に対して連絡をとり、リサーチセンターの設置について周知の必要

リサーチセンター説明会を開催する 5月15日（木）に開催の方向

各院生に対し担当者を配置する

☆リサーチ業務に関して

学内

既提出の博論のチェック

それぞれの博論の方向性等の確認

専攻ごとの違いはあるか アプローチの方向性はどうか

演奏曲目との運動

学生や指導教員に対し博論執筆に関する意見を求める

学外

国内機関 調査対象を確定していく必要

☆リサーチセンター室の稼働に関して

リサーチセンター室 現学生オーケストラ運営室を使用できることに決定

リサーチセンター室の開室時間 13:00～17:00 を学生対応の基本時間とする

### 第2回

日 時：2008年5月13日（水） 18時00分より

於：5-205室

出席者：檜山哲彦、杉本和寛、

土田牧子、中田朱美、平井真希子、吉川 文

欠席者：遠藤衣穂、中村美亜

☆大学院音楽研究科リサーチセンター説明会の準備

当日配布の資料確認

当日の進行について

当日配付資料のコピー作業

### 第3回

日 時：2008年5月19日（月） 18時00分より

於：リサーチセンター室

出席者：檜山哲彦、杉本和寛、

遠藤衣穂、土田牧子、中田朱美、中村美亜、平井真希子、吉川 文

#### ☆リサーチセンター説明会後の報告

各スタッフとその担当院生との面談の状況

今後どのような形でサポートとして関与していくのか

指導教員会議との関係 研究計画のあり方への関与

博士リサイタルとそのプログラム

#### ☆リサーチ作業について

学内の既提出博論について

他大学調査どう進められるか

海外の諸大学の実情について

実技系の博士課程そのものがどの程度存在するのか危うい状況

### 第4回

日 時：2008年6月16日（月） 18時00分より

於：リサーチセンター室

出席者：檜山哲彦、杉本和寛、

遠藤衣穂、土田牧子、中田朱美、中村美亜、平井真希子、吉川 文

#### ☆外国語試験調査結果について

調査大学数 165大学 データを単純な表にまとめた形で提出

#### ☆学位審査リサイタルについて

演奏芸術センターとの連携

今年度の報告として、学位審査リサイタルの抜粋をDVDもしくはCDにまとめたものを作成

どのような形で作成が可能なのか（著作権や肖像権などの問題も）

今までの学位審査リサイタルの音源、映像など録音・録画・保管されているのか

今年度のものを録音・録画するならばどのようなことが必要なのか

#### ☆院生のサポート体制について

サポートの内容についてどのような形で指導教員と情報を共有するか

リサーチセンターとして報告書を提出し、リサーチセンターの利用状況や

サポートしていく上で出てきた問題点などについて報告

報告書を指導教員に提出する形をとること →運営会議に報告

論文の書き方のマニュアルのようなものが作れるか

☆学内のリサーチについて

博論について内容のチェック 主担当分と副担当分各 10 編を割り振り

博士学位取得者や学内の指導教員に対するアンケート調査

もう少し問題点などをはっきりさせ、アンケート内容が明確になってから考える

☆学外のリサーチについて

国内の後期博士課程設置大学院（実技系）

論文の提出状況や指導体制、カリキュラムなど Web などを通じての調査

次年度以降のシンポジウム開催なども視野に

海外の大学での実技系博士論文の調査

アメリカの大学での Doctor of Musical Arts (DMA) 調査の必要

## 第 5 回

日 時：2008 年 7 月 14 日（月） 18 時 10 分より

於：リサーチセンター室

出席者：檜山哲彦、杉本和寛、大角欣矢

遠藤衣穂、土田牧子、中田朱美、中村美亜、平井真希子、吉川 文

☆院生のサポート状況について

今年度論文提出予定者の報告書について

指導教員とのコンタクトのあり方

☆学位審査演奏会と『博士カタログ』の作製

『博士カタログ』の作製

学位審査演奏会の録画（録音）の必要性

冊子の製作 演奏会のプログラムと論文要旨

☆学内のリサーチについて

博士論文の内容のチェックを進める

☆学外のリサーチについて

海外の大学での実技系博士課程の授与

特にアメリカの D.M.A. について調べる必要があると指摘されていた

最近 500 件の D.M.A. のデータを ProQuest から入手

いくつかの大学をピックアップして細かく傾向など調査する

国内の状況について 実技系博士課程をもつ大学の教員、職員から話を聞く

☆論文執筆マニュアルについて

書式の問題だけでなく、論文執筆のための手引きを準備する必要性

## 第 6 回

日 時：2008 年 9 月 8 日（月） 18 時 5 分より

於：リサーチセンター室

出席者：檜山哲彦、杉本和寛、大角欣矢

遠藤衣穂、土田牧子、中田朱美、中村美亜、平井真希子、吉川 文

☆院生のサポート状況について

論文提出予定者以外について

9月末までに各担当の院生について来室、面談状況などの報告書をまとめる

論文提出予定者の状況

☆学位審査演奏会の記録

学位取得者についての『カタログ』を作成するにあたり、

学位審査演奏会の録音・録画記録を残し、DVDなどの形で添付する

リサーチセンターとして担当すべきこと

『カタログ』そのものの費用がどれほどになるか見積もりを依頼する必要

☆学内のリサーチについて

博士論文の内容のチェックシート

☆学外のリサーチについて

国内の状況調査について

実技系博士課程を持つ音楽大学の状況について入試要項その他で現状確認

次年度以降のシンポジウム等も念頭にさらに調査を進める必要

海外の大学での実技系博士課程の授与

アメリカのD.M.A.論文最近500件のProQuestのデータから49大学を抽出

それぞれの大学によって演奏重視、音楽教育系など様々な傾向がありそう

論文の内容について

## 第7回

日 時：2008年10月19日（月） 18時00分より

於：リサーチセンター室

出席者：檜山哲彦

遠藤衣穂、土田牧子、中田朱美、中村美亜、平井真希子、吉川 文

☆院生のサポート状況について

論文提出予定者の状況

論文提出予定者以外について

これから論文を提出する人たちに対し、論文作成のための説明会のようなもの開催できないか

12月8日（月）17:30より、説明会開催

今年度論文提出者および主任指導教員にリサーチセンターについてアンケート依頼する

☆学位審査演奏会の記録

学位審査演奏会スケジュールの再確認

『カタログ』作成の内容確認

音楽文化学の学位取得者の記録も併記できないか 論文要旨、論文目次など

☆学内のリサーチについて

博士論文の内容チェック

☆学外のリサーチについて

国内の大学調査について

エリザベト音楽大学、大阪芸術大学、京都市立芸術大学、愛知県立芸術大学など

今年中に調査訪問をする方向で検討

海外の大学での実技系博士課程の授与

アメリカの D.M.A.論文最近 500 件の ProQuest のデータから 50 大学を抽出

うち、ProQuest に 50 件以上の D.M.A.が登録されている 37 大学について

分担を決めて、いくつか論文そのものにも目を通して調べる

☆美術研究科リサーチセンターでの取り組み

博士作品・論文のデータベース化を外注で進めていきたい

美術研究科リサーチセンター主催講演会が 10 月 31 日（金）16:00～開催

☆その他

今年度論文を提出された興味深い論文など、何かの形で発表の場を作れないか

音楽研究科リサーチセンターを紹介する HP が開設できないか

## 第 8 回

日 時：2008 年 11 月 10 日（月） 18 時 10 分より

於：リサーチセンター室

出席者：檜山哲彦、大角欣矢、杉本和寛、

遠藤衣穂、土田牧子、中田朱美、中村美亜、平井真希子、吉川 文

神永 彰（教務係長）

☆他大学訪問調査について

\* 11 月から 12 月にかけて、7 つの大学に訪問調査を行う

\* 訪問調査時には博士課程のカリキュラムや院生の指導体制、学位の種類、学位審査プロセスなどについてお伺いする予定

審査における評価基準、評点のあり方についても

\* こちらから持参する資料としては履修便覧、研究計画書、進捗状況報告書や  
学位審査のフォーマットなど

\* 訪問調査時に来年 2 月に開催予定の意見交換会についてもお知らせ、参加依頼

☆D.M.A.論文の調査

各自担当校、担当論文について調査を進める

☆院生のサポート体制について

\* 論文執筆のための説明会開催

12 月 8 日（月）17:30 より、H-413 室にて

\* 今年度論文提出者および主任指導教員にリサーチセンターについてアンケート依頼する

☆学位審査演奏会の記録・図録作成

\* 学位審査演奏会スケジュールの再確認

\* 図録作成に関連して

音楽文化学の学位取得者の記録として論文要旨の掲載

☆学内のリサーチについて

\* 既提出分の博士論文の内容チェック

\* 昨年度学位授与論文については図書館への登録を待って配分し、内容確認する

☆その他

\* 音楽研究科リサーチセンターの HP

芸大公式 HP にも簡単な紹介文 美術研究科リサーチセンターとも連絡し文章作成

\* 美術研究科リサーチセンター主導での博士作品・論文のデータベース化

**第9回**

日 時：2008年12月1日（月） 18時00分より

於：リサーチセンター室

出席者：檜山哲彦、中村美亜、平井真希子、吉川 文

☆論文執筆説明会について

\* 12月8日（月）17:30～ H-413室にて

\* スタッフはそれぞれの担当分についてごく簡単なレジュメ・資料などを準備

☆他大学訪問調査について

\* エリザベト音楽大学、愛知県立芸術大学について調査済み

\* 今後の調査にあたり調査済みの大学での状況を踏まえながら調査内容を随時検討する必要

\* 2月に開催予定の意見交換会を見据えながら、調査を続ける

☆学位審査演奏会の記録・図録作成

\* 学位審査演奏会スケジュールの再確認

\* 図録作成に関連して

音楽文化学の学位取得者の記録として論文要旨の掲載に関する通知

☆学内のリサーチについて

\* 既提出分の博士論文の内容チェック

☆D.M.A.論文の調査

各自担当校、担当論文について調査

意見交換会、および今年度末のリサーチセンター報告書作成を見据え

調査方法についての何らかの指針、枠のようなものを共有の必要

☆その他

\* 音楽研究科リサーチセンターの HP

芸大公式 HP からもリンク済み

\* 美術研究科リサーチセンター主導での博士作品・論文のデータベース化

\* 論文サポートの現況確認

## 第 10 回

日 時：2008 年 12 月 22 日（月） 17 時 40 分より

於：リサーチセンター室

出席者：檜山哲彦、土田牧子、中田朱美、中村美亜、平井真希子、吉川 文

神永 彰（教務係長）

☆意見交換会に向けて

\* 日程は 2009 年 2 月 20 日（金） 13:00～17:00 を予定

\* 意見交換会では何について話し合いを行っていけばよいのか

各大学が様々な問題点についての意識を共有することにある程度の意義

\* 意見交換会開催に際し芸大の現状、各先生方の博士についての考え方を把握することが急務

各先生方に博士課程、博士論文についてのアンケートを実施する

\* 芸大教員アンケートでの質問内容として考えられるもの

\* 意見交換会における資料として各大学の調査結果をどのように利用するのか

☆論文サポート現況について

\* 12 月 8 日（月） リサーチセンター論文執筆説明会出欠状況

☆年度末活動報告書について

\* 報告書の内容

\* 学内リサーチとして行っている既提出論文調査、学外リサーチの D.M.A. 調査について

\* 既提出論文調査に関連して

2009 年 9 月に中国南京で開催が予定されている中日の音楽研究者の学会で

芸大の博士論文についての研究報告ができないか

☆学位審査演奏会の記録・図録

\* 学位申請論文要旨に関してはすでに提出されたものを基本的に掲載する

\* 学位審査演奏会についてはすでに 2 件が開催され、うち 1 件については録画・録音記録受領

## 第 11 回

日 時：2009 年 1 月 6 日（火） 18 時 00 分より

於：リサーチセンター室

出席者：檜山哲彦、杉本和寛、遠藤衣穂、土田牧子、中田朱美、中村美亜、平井真希子、吉川 文

神永 彰（教務係長）

☆意見交換会に向けて

\* 意見交換会に先立ち、学内状況を把握するためのアンケート調査を実施

\* 意見交換会時に配布する資料として各大学調査結果の簡単なまとめ

\* 意見交換会開催日時確認

2009 年 2 月 20 日（金） 14 時～17 時

☆年度末活動報告書について

\* 報告書の提出先、報告書の配付範囲

☆論文サポート現況について

\*各院生の状況について、主任指導教員に年度末の報告書を提出する

☆学位審査会記録

\*録音・録画の状況

\*音楽文化学の院生の要旨掲載

☆リサーチセンター室所蔵の図書の閲覧について

\*閲覧希望者が来た場合にはリサーチセンター室の開室時間内で受け付け

**第 12 回**

日 時：2009 年 1 月 19 日（月） 18 時 00 分より

於：リサーチセンター室

出席者：檜山哲彦、杉本和寛、遠藤衣穂、土田牧子、中田朱美、中村美亜、平井真希子、吉川 文  
神永 彰（教務係長）

☆2 月 20 日の意見交換会について

\*意見交換会に先立ち行ったアンケート調査について

\*意見交換会での議題

\*意見交換会時に配布する資料として各大学調査結果の簡単なまとめ

\*意見交換会開催日時確認

2009 年 2 月 20 日（金） 14 時～17 時

☆その他確認事項

\*論文サポート現況について

\*学位審査会記録

今後演奏会が続く 録音・録画の予定に関してはそれぞれお返事いただく

\*年度末報告書について

提出先、報告書の配付範囲 学内および今回の調査校程度

**第 13 回**

日 時：2009 年 2 月 2 日（月） 18 時 00 分より

於：リサーチセンター室

出席者：檜山哲彦、杉本和寛、遠藤衣穂、土田牧子、中田朱美、中村美亜、平井真希子、吉川 文  
森田都紀（オブザーバー）

☆教授会でのアンケート結果のまとめ

\*アンケート結果のコメントなどに多少の手を加え、教授会資料として配布する

☆2 月 20 日の意見交換会についての確認

\*参加者の確認

\*場所の確認 大会議室にて

\* 当日意見交換会用資料

\* 意見交換会での進行

☆その他確認事項

\* 論文サポート現況について

各院生についての報告書をまとめる

\* 学位審査会記録